慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	浜野文庫善本略解題(六)
Sub Title	
Author	大沼, 晴暉(Onuma, Haruki)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1995
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.30 (1995.) ,p.279- 326
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	資料紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000030-0279

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

資料紹介

浜野文庫善本略解題(六)

大沼晴暉

例言

一、本稿は浜野文庫善本のうち、前回に引続き、四、稀覯本第五五以後の二五点（但し六二から六四迄は欠番）、五、名家旧蔵本一三点、六、附一点の、計三九点を取上げ、略解を加えたものである。

一、解題は、表紙・見返・扉・前附・本文巻頭・版式或いは書写の体式・尾題・後附・刊記又は奥書・表紙扉裏表紙等を除いた墨附丁数・修補・旧蔵印等の諸事項を、ほぼ此順で略述した。しかし説明の便宜上、必ずしも序次にはこだわらない。また修補の単なる虫損直しの場合、同じく修補時に挿入した新補遊紙の類は一々明記しなかった。

一、本稿は形態学的な事項を主とし、内容には立入らない。また著者や当該書については、人名辞書や索引・伝記・解題書・研究書類の備わるものが多く、略記するに止めた。本稿は各専門家の精査を俟つためのもので、その呼水となれば幸である。

一、使用字体は通行体を原則とし、一部旧体・別体字を残した。また引用文は、原文の句読は残したが、訓点・送仮名の類は印刷の都合上、殆ど省略に従った。

一、浜野文庫善本には、他に松崎慊堂関係の一括資料が存する。しかし、当該解題は松崎慊堂関係資料を集成の上別途に為す

べきであり、その日を俟つこととし、本略解題は今回を以て一先ず閉ずることとする。

附記　本稿と原本との照合校正等について、私の斯道文庫講座に参加せる学生諸氏の協力を得た。記して感謝の意を表する。

四　稀覯本（承前）

活字板書目（題簽）　狩谷棭斎　近写（〔浜野知三郎〕）

半一冊

濃紫色布目地空押桜花文様表紙（二四・三×一六・三糎）双辺刷枠題簽に「活字板書目狩谷棭斎編」と書さる。遊紙一丁あって、内題「活字板書目」。上欄外に半円を描き「一」と記し、「片倉玄周蔵弄」と所蔵者を肩書、「文選六臣注　六十巻合為三十巻直江山城守板又号金板／双辺有界行　十行廿二字／長八寸二分強　広五寸五分弱／羅山林恕之跋有読耕斎蔵書／清水浜臣蔵伊沢蘭軒市野迷庵（肩書）／又」の如くに書目記さる。双辺（一九・七×一三・〇糎）有界一二行、裏丁匡郭外下端に12東京宮田製と印された白口単黒魚尾藍刷罫紙使用。朱校字あり。三七丁、後に罫紙三丁遊紙として綴じらる。

本書は所謂る古活字板の書目で、前記せし如く書名を掲げ、その右肩或いは眉上に所蔵者を記し、巻冊数や版式・序跋・刊記等を摘録したもの。但しこれらの記載は全ての書に備わる訳ではない。所蔵者も棭斎・伊沢・市埜・迷庵・屋代・林・恵迪・都梁・千別・春海・泊洒等棭斎を巡る師弟友人が殆どのようである。恵迪・都梁には医書が多い。

本文中に棭斎の編纂を徴する題署はないが、本書の体式や所蔵者の範囲から見て、恐らく棭斎が目覩した古活字板の覚として書記したものであろう。安田文庫に安政二年の写本が存したと云う。ハ〇九―四―五五―一

群書治要校本（題簽）　〔狩谷〕棭斎（望之）等校　明治一六年二月―九月写（森枳園〈立之〉）　半二冊

縹色布目地空押草花文様表紙（二三・九×一六・四糎）金砂子散し双辺刷枠題簽に「群書治要校本　上（下）」と立之の筆にて書さる。罫紙一丁を遊紙とし、眉上に「丶（朱点）注文記／朱点以／分之」と標記し、「羣書治要序　序下空一字有秘書監云〻一行十三字／一オ九　蟲虫／二オ六　其具／〻ウ二　嘉喜／〻オ一　異畢／羣書治要目録／二オ五　二十卄……／羣書治要巻第一（―三十）」と、首目・各巻の校異を記す。双辺（一九・七

×一二・九糎）有界一〇行、裏丁匡郭外下端に「10」と印された白口単黒魚尾藍刷野紙使用。上象鼻表丁に「一（一三十）」と巻数、中縫同く丁付。巻四・十三・二十・廿七・廿八の五巻を欠く。裏表紙前野紙一丁を遊紙とす。下冊遊紙他と異なり、裏丁匡郭外下端に「10南鍋弐㊐製」とあり。上冊四・七・七・四・五・七・七・五・四・六・一一丁、下冊巻第十四より、六・四・四・三・三・五・三・四・四・七・七・九・六・六丁。

本書は、森立之旧蔵で後楊守敬の手によって唐土に渡り、現在台湾の故宮博物院楊氏観海堂本中に収められる天明七年四月序刊・尾張藩刻本「羣書治要」四七冊に書入られた椧斎等の校異と、各巻尾に識せる金沢文庫旧蔵鎌倉鈔本（当時紅葉山文庫にあり、現宮内庁書陵部蔵）の奥書と校合識語（朱筆）とを移写し、立之抄録の日次を墨書して一書とせしもの。

「群書治要」については、本論集第二五輯に尾崎康氏が現存本を集成し、「群書治要とその現存本」を纏めており、本書の解題も載るので、詳しくはこれに依られたい。

本書の校異は、文化四年二月から三月にかけ、椧斎が、柴擔人（秋谷・樵）と一本を以て巻十八迄対校、更に文政元年七月から九月にかけ、近藤正斎の擁書城楼に於て、市野俊卿（迷菴）と金沢文庫旧蔵清原教隆加点奥書本を以て再校したもの。本書の源である観海堂本「羣書治要」は、本論集第九輯に収める阿部隆一氏の「中華民国国立故宮博物院蔵楊氏観海堂善本解題」（「中国訪書志」収）に記載され、マイクロフィルムも将来されている。奥書を転記する金沢文庫本は既に影印・翻字が為されており、校合識語も阿部・尾崎両氏が引録しておられるので省略に従い、立之の抄録識語のみを記しておく。

一　癸未二月廿七日撮抄了立之
二　癸未二月廿八日抄了浴仙（朱印「立之」）
三　癸未三月四日撮抄了／源立之
六　癸未四月八日抄了枳園（花押「立之」）
七　癸未四月八日抄録了／立之
八　癸未四月卅日抄了／源立之
九　癸未四月卅日抄了／源立之
一〇　癸未五月三日抄了立之
一一　癸未五月四日撮抄了／枳園森立之
一二　明治癸未第五月五日抄写／校語了　立之／容膝庵麻鈔本
一四　癸未第六月十五日写校読了

一五　矣未第六月廿八日抄録／森立之
一六　矣未第六月廿九日抄撮了／立之
一七　矣未第六月卅日抄草此巻中／之校語　森立之
一八　矣未六月卅日抄了／立之
一九　矣未六月三十日抄了／源立之
二一　矣未二月廿一日抄了枳園立之
二二　矣未七月十八日抄　立之
二三　矣未七月十八日抄了／森立之
二四　矣未七月十八日写了／枳園
二五　矣未八月八日撮抄了／立之
二六　矣未九月二日抄了／立之
二九　矣未九月二日抄了／立之
三〇　矣未九月三日抄了／立之

明治一六年二月から九月にかけて移録編修したことが分る。なお巻四・十三・二十は尾張藩刻本・金沢文庫本共に欠き、巻十の狩谷望之校合識語は採られていない。巻二七・二八両巻は校異の少いこともあってか、校異・金沢文庫本奥書・校合識語とも抄されていない。

本書には朱筆校字が少しく存し、本文中には、例えば巻二の「廿四ウ九　罪作理／立之案比一行有二罪字未詳共作理否記以／俟後日之再校耳」の如き立之の案語が加えられている。本書は、恐らく最晩年の立之が蔵儲を楊守敬に譲るに当り、抄写して自らに遺したものではないかと思われる。ハ〇九―四―五六―二

椢斎畜問（題簽）　〔狩谷〕椢斎（望之）　近写（〔浜野知三郎〕）　大一冊

煉瓦色表紙（二七・二五×一九・二糎）双辺刷枠題簽に「椢斎畜問」と書さる。内題なく、「―コノ音説文ニイヘル如ク凶退ノ二音ノミサレト／引テ上ルト引テ下ルトノ二体ナレハ……」と始まる。無辺無界九行小字双行、字面高約一七・九糎、文頭抬頭一格。全一五丁。巻末に「高問ヲ承ルニ依テ奉答右ノ如シ卑陋ノ見／定テ僻論多カラン再ヒ叱正セラル、ヿヲ得／ハ幸甚シ伏テ重音ヲ俟　望之」とあり。

本書は巻末椢斎の言にある如く、二九項目にわたる古字に関する問状の答で、説文に基づき説を為していることが多い。末に和玉篇につき記している箇所を引録する。

和玉篇ハ玉篇ノ注ヲ除キ文字ハカリヲ載セテソレニ和訓ヲツケシモノナリ頗古キ写本ヲ見タリキ尤活字本モ整板モ

アリ孫強カ増字ハ勿論唐ノ時ノ本ニテモナシ宋本ノ玉篇ニヨリテ文字ヲ取シモノニテ字学ニ於テ益アルヿナシ只和訓ニマヽ古訓アルヲ取ルマテナリ今書肆ニテ漢玉トイフモノハ元板玉篇ヲ字彙ノ部分ニ従ヒ画ヲ以索ルヤウニシタルモノナリ共ニ九巻アリ故ニ九ノ玉篇トモイフ（作者ノ名ヲ題セス）ソレニ増補頭書ヲ加ヘテ十二冊トス（毛利貞斎ト云人ノ作）コレヲ十二ノ玉篇トモ十二ノ漢玉トモイフナリ本和玉篇ニ対シタル言ト見エタリ新渡古渡ヲ以テ分テル称ニハアラス丹羽藩伴周五郎篆書ノ玉篇ヲ蔵シタルヲ見タルモノアル由コレハ誤伝ナリ僕先年京師ニテ古本玉篇半巻（巻子本）ヲ見近江石山寺ニテ又十餘葉ヲ見タリ共ニ摹ノ蔵セシヲ転写シタルナリ篆書ニハアラス（玉篇ノ篆書ナルヘキ所謂ナシ）コノ本宋元本ノ刪削ヲ歴タルモノト同カラサレトモ既ニ孫氏ノ補本ナルヘクオモハルサリナカラ顧野王ノ説全存ノ珍重ノ書ナリ只伝ル所零星ノ如ヲ憾ノミ（伴周五郎ハ小浜酒井家ノ臣ニノ丹羽ノ藩ニハアラス）

「後世ノ音ヲ以テ古ヲ論スヘカラサルヿイハレタルコトシ」ともある。ハ〇九―四―五七―一

転注説　狩谷〔棭斎〕（望之）　嘉永七年一月刊（福山森立之家塾蔵板）　大一冊　木活

縹色表紙（二五・八×一七・五糎）貼題簽に「転注説」と書さる、立之の筆。巻頭「転注説」と題し、「六書ノ説指事象形会意形声仮借ノ五ハ古人ノ／説ク所畧異説無シ転注ノ一ツ人〻同ジカラス／シテ聚リ訟ルカ如シ／説文序ニ……」と本文に入る。単辺（一八・五×一三・八五糎）有界一〇行、行二〇字。版心白口単黒魚尾、中縫に「転注説　丁付」。本文九丁の次に（通一〇丁）低二格を以て棭斎跋あり、本書成立を知るに便なれば全文を引録する。

往年与友人市野迷庵論六書迷庵以互訓為転注（戴震説暗合）愚以展転引伸為転注以序建類一首同意相受考老是也等語為後人所加非許慎之旧其事去今廿餘年後獲北魏書晋書二証知前説之不誤迷庵化為他物愚亦鬚髪変白回顧之纔与一場夢無異頃有挙転注一事問者於是書昔日所考与其後所見以答若是天保乙未年二月三日狩谷望之草

裏に「嘉永甲寅正月活字刷印／以蔵于家塾福山森立之」の刊記あり。なお本書には首眉上に、「古事類苑」の編纂に携った「松本愛重氏ノ／本ニヨリテ」と朱書し、末に「以原本補正一過況斎岡本保孝」と朱書する「転注説」補正が挿入されている。これは当時浜野氏が編修に関与し、その第三巻に本書も翻字され

る「日本藝林叢書」の出版元六合館の茶刷の原稿用紙二枚を貼付し、縦に二ツ折にして挟み込まれている。原稿用紙は上欄が頭注用に大きく空き、下欄が二八行一七字で、匡郭外下端に「六合館出版部用」と印されている。

本書は椋斎の没する半年前ほどの編になる。古来漢日共に議論百出、定説なき六書の転注に自説を加え整理したもので、成立の事情は前引の跋に詳かである。椋斎は、まず論述の前程として、説文の序から後人の説を刪去し、旧に復して考えるべきを主張する。そこで後魏書の江式の「論書表」や、晋書衛衡の「四体書勢」の六書の記載を勘案考証し、江式の引くものこそ後人説の竄入せる以前のものではないかとした。

椋斎によると、

転ハ車輪ノ運ルカ本義ニテ凡物ノ移ルヲモ転ト云フ譬ハ左ニアルモノヲ右ニ移シ上ナル物ヲ下ニオロセハ物ハ即其物ナカラ用ヲ異ニスルヲ云フ注ハ灌也ト釈シ滴ノ字ヲ水注也トモ解シテ水ノ甲ヨリ乙ニ流レ注クカ本義ナリ山ノ水ヲ注シテ谷水トナシ谷水ノ注シテ川水トナリ川水ノ注シテ海水トナルカ如ク物ハ其物ナカラ名ヲ異ニスルヲ云フ転注ハ転運灌注ノ義ニテ文字ノ本義ヲメグラシ使フヲ云フナリ又灌注ノ義転シテ書ノ解シガタキヲ釈スルヲ注ト云フ難義ヲ解テ流注セシムル故ノ名ナリ戴震ハ此義ニヨリテ転注ヲ互訓トセリ段玉裁此説ニ従ヒタレトモ許宗彦カ鑑止水斎文集ノ転注説ニ是ヲ破リテ東漢已(ママ)前古書ヲ釈スルヲハ解ト云ヒ説ト云ヒ伝ト云ヒ故ト云ヒ章句ト云ヒ解詁ト云ヒ説義ト云ヒテ注ト云ヘル丁無シ鄭玄始テ箋注ノ名アリテ後多ク注ト云ヘリカク東漢ニ始リシ注ノ義ヲ以テ古ヨリ有ル転注ノ注ニ当ントスルハ篤論ニアラスト云ヘリ是論覈実従フヘシ

と転注を説いている。

況斎の補正は「三頁表／一行　異也　者（異と也の間に朱小丸を打ち、者字を挿入すべきを朱書す）／二行　曰縁　繆（縁の右傍に朱小丸を打ち、繆字に朱訂す）／……」の如く、本版を補訂したものである。なお況斎には、小島知足の問に答えた「転注説質疑」の著がある。

終りに本書から仮借の例をそっと引いておく。

也者女陰ナルヲ音ノ同シケレバ皆借リテ語辞トスルノ類ヲ仮借ト云フ

ハ〇九―四―五八―一

読史筆記存巻一（続日本紀）　狩谷椋斎　大正七年一〇

月写（〔浜野知三郎〕）　半一冊

緑色布目地空押流水文様表紙（二四・三×一六・四糎）双辺刷枠題簽に「読史筆記狩谷棭斎」と書さる。野紙一丁を遊紙とし、巻頭「読史筆記巻第一／天渟中原瀛真人天皇　天武紀ニ渟中此云農難ト／アリ旧訓非ナリ／日並知皇子尊　天武紀二年二月丁未朔癸未立正妃為皇后…」と始まる。双辺（一八・八×一二・五糎）有界一〇行、裏丁匡郭外下端に「松屋製」と印された白口単黒魚尾藍刷野紙使用。行二一字小字双行。折返し部分一格下げ。標記・朱校字あり。巻末遊紙に「康申十月十五日一校了」と朱書す。二八丁、但し第一五・一六の表は共に白紙（裏は夜久・菴美の記述）。

本書は続日本紀巻一の、時代を遂いつつ要語を摘録、解注考証を加えたもの。天皇名・人名・地名・干支・事項・訓詁・語彙等を漢籍の出典考証を援用しつつ略解している。「官本ト本作某」等と小字双行にて本文中に校勘の為されている所もある。編者は題されぬが、内容体式から、六国史に造詣の深い棭斎の手に係るかと思われる。東京大学綜合図書館に同名の写本が存する。これは「宋史」の読史筆記で、海保漁村の写本、島田氏双桂楼旧蔵。ハ〇九―四―五九―一

倭名類聚鈔附録時令・楽曲　〔狩谷棭斎〕校注　大正一年一二月写（〔浜野知三郎〕）　大一冊

朱色表紙（二六・九五×一九・二五糎）金砂子散し双辺題簽に「倭名類聚鈔附録」と書さる。扉左に「倭名類聚鈔附録」、右に「時令／楽曲」と目録題。内題なく、墨で塗りつぶした墨格の如きものの上に重ねて「歳時部」と朱書、「春三月／春／正月初春○訓武都紀見万葉集第五巻（万葉集は挿入符○を打ち補入さる）」と本文に入る。巻頭書脳部に「余校按和名類聚鈔、一従十巻本、而二十巻本所／多時令楽曲官職国郡殿舎湯薬六門、亦不得従／廃毀、今皆録存、且管見所及、聞間加校按注、其有所不足者、及為補之、与校按十巻本之例少不同也」（校字藍筆）の識語あり。無辺無界一〇行小字双行。字面高約二一・〇糎。朱墨抹消・眉上欄脚行間への按文・書入多く、朱の鉤点や○●△等各種符号を以て頭注標記が為されている。朱墨の修訂増補が多く輻輳しており、浜野氏の校字メモの小片四葉が挟込まれている。直すべきは藍筆で訂されている。第二丁第五行迄「歳時部」、次いで「音楽部曲調類」が追込で書され、通しで一四丁、次に「壱越調」の諸曲の各文献の出入を一覧表の形に纏めた一〇丁（按諸書曲名之出入声調之参差如聚訟者又有別字有異名　今作之表以

便検閲云）があり、巻末遊紙に「右梜斎翁手稿本大槻博士ヨリ借リ写ス／大正元年十二月／大正二年一月校了（此行藍筆）」の書写奥書がある。

本書は巻頭の識語にある如く、二〇巻本巻第一歳時部第四春三月第十二から冬三月第十五に当る部分と、巻第四音楽部第十曲調類第四十九の部分を抽出引録し、文献各説を交え考証按文を加えたもので、増補や書改めた箇所が多い。曲名は他書によって旧を改めたものがかなりあり、一例を挙げれば、従来「曹婆筑」「紫諸懸」の二曲とされていたのを「曹婆」「筑紫」「諸懸」の三曲とし、「○旧以曹婆筑為一曲名以紫諸懸為一曲名⊙（外側朱）今皆（皆字挿入）意改△（外側朱）天平二年七月紀云定雅楽雑楽生員諸懸舞八人筑紫舞二十人是可以証為三曲之名」と考証する。なお眉上に「⊙（外側朱）懸亦誤懸△（外側朱）夜鶴庭訓抄以曹婆為一曲名又口遊（末三字朱書）」と標記する。

巻末の壱越調諸曲の一覧は、伊呂波字類抄・口遊・拾芥抄・舞曲口伝・撮壌集・夜鶴庭訓抄・龍鳴抄の各出典の出入と声調の参差と曲名の異同とを表示した利便なもの。

本文には（音楽部）「並河氏」「安倍氏季尚曰」等としてこの二人の説を引くことが多い。巻頭識語に云う六門全てが完存するのは稀のようで、各所に一部が移写され珍重されている。本書の自筆本は川瀬一馬氏蔵か。

なお大槻家の蔵書は、静嘉堂文庫と早稲田大学図書館にかなりまとまって入っているが、一部は散佚してしまった。ハ〇九—四—六〇—一

常関遺文附雑抄　狩谷梜斎（望之）　（附）〔森枳園〕

写（〔森枳園〕）　半一冊

焦茶色表紙（二二・六×一五・七糎）双辺刷枠題簽に「梜斎遺文」と書さる。見返右肩「高橋利助米渡世」と書さる。罫紙一丁を遊紙とし、巻頭「常関遺文　梜翁遺文／威科説／銅科長一尺三寸、葉径三寸五分、枋広八分強、中有渠、／枋頭斜殺、……」と本文に入る。本説末に「文政丙戌八月朔狩谷望之記」の署名あり。左右双辺（一七・四×一一・七糎）有界一〇行、白口単黒魚尾の墨刷罫紙使用、行二一字内外小字双行。第四丁裏に朱引、第五丁表迄朱句点、第一一丁表迄朱校字あり。また朱墨の校字附箋が貼付されている。第一一丁裏「以上数條梜斎狩谷望之先生諸説考案／書跋也借于小島氏識」とあって、以下は枳園雑抄の如し。裏表紙見返「仙洞幽姿別有春不教顔色

汚斗神墨池／穎起桃花浪莫使漁人問水浜」と書さる。四三丁、後に野紙四丁白紙のまま綴じらる。

本書には以下の、各書に書入られた椛斎の識語・題跋が収められている。明板野客叢書（文化甲戌年二月椛斎／狩谷望之志、）（丙子七夕暴此書因記之、／望之、）明板拾遺記・足利学宋板周礼・明堂本国語（丙子初秋暴此書、因記之、）荏柄詩板・宋本賦川百川学海・陳仲弓碑・活板蔵経目録（文政改元年六／月十日）明画録（文化丁丑春三月）顔氏家廟碑（己卯陽月端五）無題〈石本〉同（丁亥六月赴（赴朱校字挿入）於躋寿館薬品会……〈九月廿／八日〉）題王澍臨醴泉銘（椛斉望之観於木倉山房嶽蓮朝爽／之処）関羽賛。

次いで枳園の雑抄かと思われるもの、主要なるを挙げれば、○二如亭群芳譜巻一茶譜・区廷元老鋪筆単○詹大有筆名価付・鹿児島藩／横山正太郎／建白（庚午／七月二十八日／横山正太郎）○寄陳上人○湖海詩伝目録○唐六如居士全集○安部朝臣小水麿般若経跋文○楽訓（右左少将白川侯所撰右桑名城主松平越中守定信朝臣致仕号楽翁／文化六年己巳念五日為　西皋雅名／源政礼敬書）と続く。他に題書せず、引録のみのものあり。

本書は枳園の識語に記す如く、椛斎の高弟小島成斎（知足）の下より借出し、抄写した椛斎説と題跋で、丙子文化一三年七夕の暴書や、丁亥文政一〇年幕府医館躋寿館への発向、松崎慊堂の木倉山房に於ける交歓等伝記面でも貴重な資料となる。なお後半の部分は横山正太郎の建白に、「府藩縣共……旧幕ノ悪弊ヲ暗ニ新政ニ遷リ」「外国人ニ対シ」「朝鮮征代（ママ）」等の語があり、年紀の庚午は椛斎没後の明治三年かと思われる。従って前半と異り、後半は枳園の雑抄であろう。

なお、常関とは、常関（閑とするもあり）書院を称した椛斎の書斎号である。ハ〇九―四―六一―一

左伝管窺　豬飼敬所（彦博）　近写（〔浜野知三郎〕）

半一冊

紫色空押卍つなぎ表紙（二四・三×一六・五糎）双辺刷枠題簽に「左伝管窺豬飼敬所著」と書さる。扉左に「左伝管窺」、裏左に細字で「此管窺ハ本書標記ノ煩ヲ除キ自家ノ／説ノミヲ自筆ニ撰ミシ物ナリ」と記さる。巻頭「左伝管窺／豬飼彦博」と題し、序以下の要語を摘録解注す。無辺無界一〇行二〇字小字双行。字面高約一九・九糎。句読を附す。敬所の訂正のままに写されたものか、墨筆訂正や挿入線等そのままに残り、朱校字が一箇所為されている。巻末遊紙に「右左伝管窺一巻借愛日堂所

蔵豬飼敬所翁／手稿本写之」の奥書あり。一二丁。但し第一一丁裏白紙。白紙の後は体式異り、標目から一格空きで書写されていたのが、低一格改行で自説を述ぶ。薄葉紙に書写、入紙が施されている。

本書は扉裏の識語にある如く、敬所の左伝に書入れるべき眉上標記部分を本文化し、一書としたもの。要語要文を摘録し、一格を低して自家の説が述べられている。敬所説は、惣じて版本眉上に標記されたものと、本書の如く標記すべきものを取上げて一書に編成したものと、二種の形で伝存されている。

無窮会図書館に、敬所標記書入の、安永六年三月刊（京　越後屋清太郎・中江久四郎）那波魯堂（師曽）点「春秋左伝」三〇巻大一五冊が存し、屢次にわたる自筆の標記書入が稠密に為されている。管窺に撮る所、書名の示す如く、ほんのその九牛の一毛に過ぎない。なお同じく無窮会図書館に、上野不知斎の近写本「左伝管窺」が存し、この自筆書入本と、朱校が為されている。

本書は序に続き、後序・隠公から僖公迄の記事を載せ、「僖公伝四年風馬牛不相及」の項の後第一一丁裏が半丁分白紙のまま、「襄三十年伝亥有二首六身下ニ如身」「昭二年（実は元年）伝晦淫惑疾、明淫心疾、女陽物而晦時、淫則生内熱惑蠱之疾、」「韓宣子観書於大史氏、見易象与魯春秋、曰周礼尽在魯矣、（昭二年伝劈頭の記事）」迄を存する。ハ〇九―四―六五―一

琴鶴堂詩鈔存巻一（首欠）巻三　〔古賀穀堂〕　写　大三冊（仮綴）

表紙なし。「昭和　年　月ヨリ当社経営ノ／事業ニ従事茲ニ満　年ニ／及ヒ候段誠ニ奇特ノ至リニ候仍テ／（隔一行）／ヲ贈与シ其勤続ノ功ヲ表彰候事／昭和　年　月　日／麻生鉱業株式会社／社長　麻生太賀吉」の「表彰状」（二七・七×四〇・四糎）を二折、覆表紙の如くして保存さる。第一冊首欠。後述の版本によるに、七言古詩「夢遊松島歌寄仙坮古梁禅師兼眎大槻志村二文学」の途中「豈無凌雲志画餅徒自悲夜半御風冷然善走過東海如（朱点を打ち挿入さる）閃電……」と始まる。第二冊「琴鶴堂詩鈔巻三／五言絶句／御調阪夜雨／山鳴夜雨来黯淡松杉影……」とあり、第三冊は、第二冊末「秋晴」の詩の続きの如し。無辺無界八行二〇字、字面高約一九・一糎。白文、但し一部朱句点。朱墨校字訂正、疑問の字に藍点打たる、爾の字に多し。一部朱校標記されるも、本文を訂正後、標記は全て胡粉で塗抹されている。尾題第一冊「琴鶴堂詩鈔巻一終」、第三冊

「琴鶴堂詩鈔巻三大尾」。第一冊首欠、七丁、第二冊一三、第三冊六丁。第一・三冊には本文共紙の裏表紙を存し、第二・三冊下端には鼠害がある。

本書は天保一五年九月刊、古賀氏清風堂蔵版の「穀堂遺稿抄」八巻と比するに、巻六＝琴鶴堂詩鈔巻一の後半七言古詩一一首と、巻八＝琴鶴堂詩鈔巻三の全て、五言絶句四九首七言絶句六七首に当る。但し七言絶句の「雪意」は題名のみ、版本に依るに次の「遊河上」の題名と前一行、即ち全四行分を空白としている。第二・三冊は「秋晴」の途中で移るが、欠落はない。本写本は次掲本と同一筆写者で、半葉の行数は版本と異なるものの、一行の字数は等しい。校字で「一字ケツ」とある版本の空格箇所や、○を打って後から校字挿入されている箇所は、追込んで書かれている。次掲の「潜窩文草」では、「玉水簾」で、版本が□で不明とした箇所を「既」としているなど、単純に版本の写しとは考えにくい所がある。

本文中、本文庫に関係の深い亀井南冥と、玉露童女に関する詩を引録する。

人有談大村両書生如北筑将謁亀井南冥聞其発狂不覿而帰戯賦

南冥狂客発真狂笑殺両生空断腸可惜掌中無片玉徒然袖手下崑岡

為冠山侯題女公子遺艸

掌珠弄得六逢春莫是観音暫化身韶慧未曽聞曠古黄金何惜鋳斯人

又

遺草殷勤諫酔翁。廟堂君子愧精忠。仙都俄借女才子。応為玉楼記未工。（朱句点）

ハ〇九―四―六六―三

潜窩文草存巻三（首欠）巻四　〔古賀穀堂〕　写　大一冊

（仮綴）

表紙なし。「大正　年　月ヨリ当社経営ノ／事業ニ従事茲ニ満　年ニ／及ヒ候段誠ニ奇特ノ至リニ候仍テ／（隔一行）／ヲ贈与シ其勤続ノ功ヲ表彰候事／（隔一行）／昭和　年　月　日／麻生鉱業株式会社／社長　麻生太賀吉」の「表彰状」（二七・六×四〇・五糎）を二折、覆表紙の如くして保存さる。首欠。版本「穀堂遺稿抄」巻三＝潜窩文草巻三「記」に依るに、「浮翠楼記」の途中、「疵行之過激或不能無異議於後然而……」と始まる。巻四―「潜窩文草巻四／論墓誌銘祭文（小字で後から書入

れられたる如し）／王安石論」と小題して本文に入る。無辺無界一〇行二〇字、字面高約一九・六糎。白文。一部朱校字を標記し、本文を訂正後、標記を胡粉で抹消することまた同じ。尾題「潛窩文草巻三（四）終」。巻末一葉切裁さる。なお巻四末文「尚饗」の二字は版本には見えない。巻三―一〇首、八丁。巻四―五首、一〇丁。

本書は版本「穀堂遺稿抄」の巻三巻四にあたる「潛窩文草」巻三「記」（首欠）、同巻四「論墓誌銘祭文」の箇所。前掲「琴鶴堂詩鈔」と同一の筆写者に成る。なお琴鶴堂、潛窩、刊本を蔵版した清風堂、ともに穀堂の別号である。前条をも御参照頂きたい。ハ〇九―四―六七―一

謹堂日誌鈔（題簽）存一弘化四―安政三　〔古賀〕謹堂　写

半一冊

茶色空押卍つなぎ表紙（二二・六五×一五・〇五糎）左肩直に「謹堂日誌鈔之一」と書さる。内題なく、「弘化四年丁未　千八百四十八（抹消点を打ち、右傍に「七」と訂さる）年／謹堂先生三十二　正月晦日侗庵先生卒／二月七日払暁発引葬会葬者数十人／三月廿八日御儒者被仰付御足高是迄之通被下／如父時御役宅住居於学問所教授方可被相勤御／手当扶持十五人扶持上下席順是（抹消さる）只今迄之通／五月十日今茲丁未之暦ヲ西法ニ準シテ洋暦一枚／ヲ作ル……」の如く始まる。双辺（一八・八×一二・四五糎）有界一〇行白口茶刷罫紙使用。行二〇字内外、漢字片仮名平仮名混用。全三九丁。

本書は弘化四年から、「安政三年丙辰　千八百五十六年　四十一」歳迄の、侗庵男、洋学所頭取の任についた謹堂の日誌を摘録したもの。入退塾、変幻極りなき幕末の世情、読書名、交友の来往等、摘録ながら興味をそそられる記事が枚挙に暇ない。読書記事では洋学所頭取に挙げられるだけあって、朱子学の家の子であるに拘らず、洋書をよく読んでいるのに驚く。漢籍との比は三対一位であろうか。弘化四年七月三日晩の箇条に曰く、

羽倉縣令枉駕曰我餘リ洋書ニ淫ス宜痛自懲艾又曰洋学ヲ主張スルハ侗庵府君ナラバヨシ足下ニテハ人将以為疎弃漢学乎（是ハ吾徳望猶薄キカ故ナリ）二言殊中吾膏肓宜昕夕服膺不失

洋学に関心の深い宇和島藩伊達家の世子は謹堂に入門する。

嘉永元年　六月朔　宇和島侯及其世子初謀面ス

廿二日宇和島邸ニ至ル世子入門の儀あり

廿三日大槻盤渓来見髻断以来初而相面す

（十二月）九日エルンストの画を摸す三葉を得たり

記述は読書した書物の名が最も多く、本の検閲や先人遺文上木の相談、原書を訳した記事等も載る。当時流行の時局に関する木活開版書か、嘉永五年十月三日の条には以下の如き記事も存する。

前月廿七日長州留守居三井善右ェ門来て別帋之通申述立去る　手扣　御先代之御著述海防臆測と申書を家来山田亦介と申者活字版摺立候処安積祐助様迄御内吐之趣……右摺立之書物取上焼捨ヒ申付猶亦介身柄咎方をもヒ申付候……先以奸人之誣謗をも可免と喜たり……先霊江報告す

安政二年三月九日には

川田誠之助満清記事ヲ開刻せし趣内〻聞及令候退塾申付

昌平黌や洋学所・医学所をめぐる儒者・儒医・大小名や役人の動勢を窺わせる記事も多い。安政二年四・五月頃には勝海舟が頻繁に現われる。

四月六日昼勝麟来る由なれ共不逢

五月十日勝麟太郎来過五半頃より至九半頃而去

安政二年十二月七日には「聞川田八之助今日儒員トナル」とあり、

廿二日去官舎遷復原楼　我顕祖以寛政十一年九月廿五日始入泮水官舎今以安政二年乙卯十二月廿二日去官舎凡三世五十有七年隆官盧猶私構庭間所栽諸樹皆長大大半手沢所泌漬尤覚惻然

と感懐を洩らしている。安政二年末から三年にかけ洋学所（蕃所調所）の改革や人事につきての目論見等が記されている。

安政元年四月八日には、伝聞として、長州浪人吉田寅次郎（松陰）が、佐久間修理（象山）の謀により、米舶に密航乗船せんとして戻され、上り屋へ入った記事がある。学者とは云え幕府の枢要に据っていただけに、単簡ながら世情・世相を活々と伝える記事が多い。面白いものでは

（弘化四年）八月五日豢養牝猪ヲ宰殺ス尤池田太仲ナル者来テ細ニ解剖シテ示セリ内象ノ美ナル真ニ言ガタシ

（嘉永元年十月）廿五日謙三冬禄金を受取来出奔不還四十八両式歩餘

（十二月）十一日賊一件落着不届ニ付死罪可申付処主人立て助命相願ニ付助命申付ル江戸不罷在様致へし

弘化四年十一月十八日には「藤森恭助（弘庵）講釈聴脇指盗らる」の記事もある。

古賀謹堂、別号茶渓、明治一七年没、享年六十九。ハ〇九―四―六八―一

倭名類聚抄引目（題簽）〔岡本況斎〕　近写　中一冊

焦茶色表紙（二一・二五×一四・七五糎）双辺刷枠題簽に「倭名類聚抄引目」と書さる。内題なく、巻頭「周易／（解注低二格）隋志周易十巻、魏尚書郎王弼注六十四卦六巻韓康伯注繫辞以下三巻又撰易略例一巻／旧唐志周易二巻、□卜商又十巻、王弼韓康伯注（王弼・韓康伯に朱引）／新志周易王弼注七巻、王弼韓康伯注十巻、（王弼・韓康伯に朱引）」と始まる。無辺無界一〇行二〇字ほど小字双行、字面高約一七・七糎。第七丁表迄朱句点・朱引が存す。校字は○を打って標記す。全五五丁。巻頭に「瀧本／臧書」「洒竹文庫」両朱印を鈐す。大野洒竹旧蔵。

本書は倭名類聚抄の引書目録で、巻末三丁（表末行より）が和書目。ほぼ四庫分類に依って排列され、書名とそのテクストを記し、藝文志から引いてその亡佚を注記したものもある。佚書が含まれていることが分る。但し書名のみの項も存する。和書は全て書名を載するのみ。況斎自筆本が尊経閣文庫に収まる。

ハ〇九―四―六九―一

和名類聚抄（大須本・有欠）二巻　源順撰　稲葉通邦校　享和一年三月刊　〔修〕（名古屋　永楽屋東四郎等）　大一冊　摸刻大須宝生院蔵〔鎌倉〕写本

渋刷毛目格子文様表紙（二六・三五×一九・〇糎）単辺題簽「倭名類聚抄」。「山州員外刺史田公即……」に始まり、末に「内慙公主之照覧外愧賢智之盧胡耳」に終る残存せる序後半三丁（丁付又一・又二・三）を冠せ、内題「倭名類聚抄巻第一（二）　源順撰（二にはなし）／（隔一行）／天地部第一　人倫部第二」とし、一行を隔て、目録を冠せて本文に入る。単辺（二二・八×一六・二糎）無界八行小字双行。版心白口、中縫に「倭名抄」、下象鼻に丁付。白文。虫損跡迄そのままに摸刻さる。巻末「以下脱」とし、「身躰十七　**腎**」迄を刻す。通三六丁（本文第一葉丁付「又三」）。寛政十三年正月　稲葉通邦誌〔解題跋〕四丁（通丁付卅七―四十）あり、単辺奥付「享和紀元辛酉歳暮春開彫／／発兌書肆／京都　銭屋惣四郎／大坂　柏原屋清右衛門／江戸　須原屋市兵衛／尾張名古屋玉屋甲　永楽屋東四郎」。首に「玉木文庫」「観月／園」、末に「橘／勝良」の朱印押捺さる。

倭名類聚抄の古活字版、二種の整版については本稿㈣と㈡で既に触れた。本版は名古屋の大須観音として著名な真福寺宝生

院蔵の、現国宝で鎌倉期と見られる古写本の残存巻の摸刻で、近世期に通行した二〇巻本とは異なる一〇巻本系。大須本は巻第二形体部第三の途中迄の零巻であり、本文中にも「此間一張亡失」や、「鼻口類十五」の如く首・末の一行のみが残存するなど完全ではないが、現存最古の十巻本として甚だ貴重である。古典保存会や馬淵和夫氏の「和名類聚抄古写本声点本本文および索引」に影印され、摸刻の本版は京都大学国文学研究室編「諸本集成倭名類聚抄」に初刻本が影印されている。

初刻本は「尾州大須宝生院蔵倭名抄残篇／尾張下臣稲葉通邦(ママ)騰写」と題し、四行を空け、「巻首一張亡失」と刻し、「是服膺誦習之義……」以下の序文を記す。修刻本は前述の如く、この佚失分六行を加え、その為題署部分が削去されている。初刻本第二丁裏第三行第三字以下「此間一張亡失」と刻する部分も、修刻本は「以下二葉之内」と傍記し、第三丁表迄序文を刻し、裏に内題・目録を記している。初刻本の序は二丁で、修刻本は「又一」「又二」と丁付を改め、第三丁は新刻。初刻本の第三丁は「和名類聚抄巻第一／〇部第一　人倫部第二／〇部第一／〇類一……／……田野類六」と題し、目録を冠せ、一行を隔てて「弦月　……」と本文に入る。修刻本は丁付を「又三」とし、弦月の前に景宿類一の五行分が加刻されている。

本書の解題跋に、此書出版の経緯と意義とを述べてあるので引録する。

右倭名抄残本者所レ得二於尾張国大須宝生院蔵一也其蔵多二古写本一世人所レ知也……学徒所レ因皆在二今本一是以別著二考異一篇一以便二校讐一今也時属二文明一逸書群出天下之広必有二倭名抄逸篇一在二多方一君子得而補之則他時有三復二源朝臣全本一也誠如レ此則後生幸也

ハ〇九―四―七〇―一

集注倭名類聚抄存巻三　勤息殷慶　写　大一冊　文明一九年三月清原家奥書本

焦茶色表紙（二七・三×一九・三五糎）双辺刷枠題簽に「倭名類聚抄　巻第三」と書さる。扉左に「倭名類聚抄巻第三神祇部」。巻頭「集注倭名類聚抄巻第三　勤息殷慶撰」と題し、「神祇部第三／天神類一（―神人類六）」の目録を冠せ、裏丁「∴神祇部第三／∴天神類一／・天神(アマツヤシロ)　・天探女(アマノサクメ)見日本記私記石船鳥也見古事記序之（頭点全て朱筆）」と本文に入る。無辺無界九行小字双行。字面高約二二・五糎、但し朱点を含む。標目項目の頭にはほぼ朱点・朱鉤点を附す。一格乃至二格上げの指定標記箇所あり。第三八丁表

末行「文明丁未春王三月庚申之日書写之　清原」の本奥書朱書され、裏「右依破損加修補訖／正保三丙戌年八月仲旬／神道長上卜部兼里在判」の加修識語墨書さる。三八丁。

本書は和名類聚抄をもとに増刪改訂し、注を施したもの。集注倭名類聚抄を名とするが、大幅に増補改変され、編成と云い注解と云い、殆ど別書の如きである。特に和名抄にはなく、卜部家に関連の深い神社・祭礼の項が増補され、これが大部分を占めている。注には「師説」の語も見える。川瀬一馬氏が本帙につき「増訂古辞書の研究」に解題されている。

文明一九年の清家の当主は宣賢の養父宗賢で、宣賢は卜部家から清原家に入り、両家の関係は密であった。なお天理図書館吉田文庫に一本を蔵し、本書と同じ奥書を持つ。国立国会図書館にも、岡田希雄氏旧蔵の薄葉近写本が存するが、此また加修識語とも本書と同様である。

作者については、今知る所がない。ハ〇九―四―七一―一

字鏡集抄出　伴信友抄出　緑川真澄改編　写　大一冊

縹色布目表紙（二六・九×一九・四糎）左肩直に「字鏡集抄出」。巻頭「◉（朱丸）字鏡集抄出／∴安之部／○アハタフ亦ヒサノホ子ヒサノアヒタ臏髓同……」と本文に入る。無辺無界五行（巻頭六行）小字双行、四段に書さる。字面高約一九・五糎。折山表丁に「あ（……を）　丁付」記さる。但し五十音柱記はその項初丁のみで、「え」「ひ」には記されていない。挿入符を附した朱墨信友書入や朱校字がそのまま移写されている。第七三丁表に「追加」あり、末に「合二千八百余言」と書されている。七三ウに以下の識語二則が記さる。

ヘ（朱鉤点）右字鏡集本編七巻以源定信朝臣松平越中守蔵本及近江国石山寺前蔵古本屋代弘賢翁蔵本批校槐之但屋代本無題名表帋書和玉篇蓋後人之私所題也本之跋云寛元三年四月一日小河法印承澄示云朱点東宮切韻墨点唐玉篇也自支脂（ママ）至于灰咍舌内也寛元三年五月十日尚成云墨点不審字也朱点詳之無不審字也法蔵寺蔵止　今按小河法印承澄老承字不可読蓋承字也誤矣尊卑分脉曰藤基房公子師家公仁治元薨六十九師家公三男澄快建治六入滅四男承澄僧正横川長吏号小河忠地法印或云基房公子十末ニ考アリ（割注朱筆）

ヘ（朱鉤点）法蔵寺之三字筆勢不似本行墨痕新後所署也

本篇一之部注云虎関和尚作月五（ママ）中岩、閑居（ママ）一レ一、露九ニ

幽躰、故身一レ一（ママ）、法一不レ一、随レ一一レ二、道一不レ一、時節一レ二、止（朱句点）案虎関弘安元年生貞和二年

波虎関之生後于寛元三十餘年也蓋後人所加筆者也　／（朱合点）凡仮字間有出格者蓋多伝写之誤也就中比校異本有帰其正者従之不然者姑従旧不改（隔一行）

へ（朱鉤点）字鏡集全部昔年以意抄之録以為一巻然為猶未便参閲嘗欲以頭音分類之以備捜索之蓋而多事不果頃緑川真澄就余抄本逐分類之以成冊於是乎余志幸就矣因仮其本使課入写畢但本篇中草木禽獣虫類専別抄出既扨于余所纂輯動植名彙中故不載于此云

文政七年正月十五日　　伴信友識

次に「㊥末ニ考アリ」と識語に記された考証一丁、「㊥（此符号朱筆）尊卑分脉七ノ三十八丁」とし、左大臣藤原基房子師宗の男の系図を引き、末に「考」として承澄の考証を附す。本文七三丁、但し「廿九卅」と一丁跳丁あれば、実数七二。首に「蓼渓／書屋」「樟陰／山房」二朱印押捺さる。

本書は字鏡抄の改編本と見做される七巻本字鏡集（字鏡集には別に二〇巻本あり）の語彙を五十音順に並び変え、捜索に便ならしめたもの。信友の識語に依れば、試みて多事果せずにいる間に、緑川真澄が信友の抄本を使って成就、それを写さしめたものだと云う。但し草木禽獣虫等の所謂る本草に関するものは既に別に纂輯してあるので省いたとある。信友は他に「字鏡集索引」を編んでいる。

緑川真澄は、加藤出雲家士、没年未詳。ハ〇九―四―七二―一

運歩色葉集　大正三年一一月写（浜野知三郎）　大四冊

摸写国立国会図書館蔵榊原芳野明治一二年一二月令写

塙本

朱色表紙（二六・五五×一九・三糎）金砂子散し貼題簽に「運歩色葉集自伊至利一（自奴至久二・自屋至由三・自免至須四）」（目録割書部朱筆）と書さる。扉中央に「運歩色葉集　一自伊至利（二自奴至久・三自屋至由・四自免至須）」（目録割書部朱筆）。巻頭「〇（朱丸）運歩色葉集（朱引）／〇（朱丸）伊／・威勢（井イセイ）・威光　・威風……（頭点朱筆）」と本文に入る。イロハの標目は「∴（朱筆）与」の如く書されしもあり。無辺無界八行小字双行。字面高約二一・一糎。折山表丁に「イ（―ヲ、首丁のみ）／丁付」。ヌ及びワ以下、丁付のみ。朱引、語頭に朱点を打つ、但し第三冊以下なし。考証注記が書入られ、朱校字、僅に茶筆を交ゆ。第二冊末の草鹿図には薄墨用いらる。巻末に「右嘱忠韶塙氏以其所蔵之本傭写時当臘廿八故写誤／頗多矣然以斐帋謄写者故脱字則鮮矣将他日照

／善本訂其訛／明治十二年十二月　榧原芳埜」一丁。次いで「天正本巻首云」と朱書し、末に「天文十七年著雍涒灘菊月吉辰」の年紀ある以呂伴歌の解二丁。裏に「天正本奥書云（朱書）／雖為悪筆当用之間書写丁亥之年中夏／写始至初秋全部三巻成就後見之方者／題目一返之御影向頼入処無他事／天正十五年丁亥林鐘十一日申之刻写畢ヌ／実相坊日詠花押」の西来寺蔵天正十五年本の奥書写さる。遊紙表に「大正三年十一月十一日写畢於大久保僑居／浜野知三郎記」の書写奥書あり。

本書は節用集や下学集等に材を採り、換骨奪胎・増補改纂しながら編まれたイロハ引類書形式の国語辞書で、

、（朱点）越知山（ヲチサン）越前天武自鳳二壬戌到天文十六丁未八百八十七年也（越前・天文に朱引）

の如く、天文十六、十七年から年代を逆算しており、イロハ歌の解の年紀と相俟って、その頃の成立と考えられる。排列はほぼ一定のルールの下にイロハ順に、熟語を二字語・三字語の如く字数順に揚げ、その後に員数語・単字・便覧を排する。便覧には一覧・名寄せの如きものが多く見られ、巻末には魚名・鳥名・獣名・虫名・花木名・草花名の本草名寄便覧が附されている。

本書は静嘉堂文庫蔵〔室町末〕写本（「中世古辞書四種研究並び

に総合索引」に影印さる）を写した内閣文庫蔵塙本の、榧原芳野令写本（国立国会図書館蔵）の又写しで、巻末の記載からして、川瀬一馬氏蔵大槻文彦旧蔵・榧原本の転写本を、更に写したものであろう。なお芳野の蔵書は、没後文彦の兄如電の手により、東京図書館（現国立国会図書館）に寄贈せられた。

本書は、イロハ引の類書・百科辞彙式通俗国語辞書であるが、同種の節用集に比べ類を分つことやや分りにくく、引きにくいため、通俗国語辞書としては節用集ほど普及しなかった。歩を運ぶのは用を節するほど便利でなかったと見える。ハ〇九―四―七三―四

色葉字類抄　〔橘忠兼〕　大正三年八・九月写（浜野知三郎）　大三冊　底本国立国会図書館蔵明治一二年一一月榧原芳野写本・天冊二巻本系・地人冊一〇巻本系

朱色表紙（二六・七×一九・一五糎）金砂子散し題簽に「色葉字類抄　天（地・人）」と書さる。扉左に「色葉字類抄　天（地・人）」。叙曰で始まる「色葉字類抄巻上」〔叙〕、三行を隔て、「天象付歳時……名字／已上二十一部毎一字在之」とある目録第二丁表迄を冠せ、裏「色葉字類抄巻上／伊／天象付歳時（付以下朱筆）／雷。イカツチ貞回反又作雷。雷（ライ）。公（コウ）。……」と本文に入る。無辺古文作閃（朱筆）

無界八行小字双行、字面高約二二・九糎。墨声点、朱（一部茶）墨校字書入、僅に朱句点を存す。朱筆は天冊第一六丁迄にて以下僅少。虫損箇所もそのままに記され、墨○にて語類を分つ箇所あり。天冊末に「文政四己六月　写之」の元奥書あり、遊紙に「大正三年八月十九日写畢」の書写奥書記さる。天冊一一〇丁。

地・人冊は底本を異にす。扉に次いで、地「宇為能於久也／末計不古江天／伊呂波字類鈔賈」、人「安左幾由女見／志恵比毛世須／伊呂波字類鈔文」の目録外題を冠せ、地冊「△宇／○天象付歳時」、人冊「伊呂波字類抄八／○安／○天象附歳時」と題して本文に入る。字面高約二二・六糎。地冊末「自以度（ママ）無者古本在□（原本虫損痕）至／以師卿公條卿本写之漢和之文字／不審不一連〻可見直者也」の元奥書と、遊紙表に「大正三年八月六日写畢」の書写奥書あり。人冊末「自以至無者古本在斯室／以師卿公條以本写之漢倭之文字／不審不一連〻可見直者也／（隔一行）／于時天文壬辰稔八月日／通議大夫小槻／右三冊借花山院黄門／常雅卿本書写校合了／ニ時享保第八癸卯春／八座資時／弘化三年二月　正四位下秦親典（「晩翠／舘／之章」朱印題署の上に鈐せらるを摸写す）の元奥書あり。表白に次ぎ、「黒川氏字類抄考証畧之」とあり、一行を隔てて「以上字類抄考証係黒川春邨氏碩鼠漫／筆所載鈔焉而為不尚多尚旧之証也／明治十二年己卯冬十一月　榊原芳野（朱印「芳／野」「作良／之印」摸写さる）／（隔一行）／再考此本日野従一位権大納言為参議時所校之書也」の榊原本奥書あり、遊紙に「大正三年九月七日写畢／浜野知三郎記」と識さる。地八五、人一〇四丁。天冊遊紙に「稲荷大西／東家之蔵」「銀座／第三街／廿二号／地／市／川」（木葉型）二朱印、「榊原家蔵」墨印、「故榊原芳埜納本」「東京／図書／館臧」朱印摸写さる。地・人冊目録外題下方に「稲荷大西／東家之蔵」、各巻末に「晩翠／舘／之章」朱引を摸写し、地冊巻頭「榊原家蔵」墨印摸写さる。

本書は平安末期に編修されたイロハ引類書形式の国語辞書。音引の辞書として最も初期に属する。和名類聚抄と共に、分類意識や編纂方式が、後世の辞書のみならず、類題の漢詩文集や歌集等の文学書編修に与えた影響は甚だ大きい。

花山院本と称される本帙は、天冊が二巻本系の上巻、地・人冊が増補・改編の多い一〇巻本の取合せ本で、「通本」「伊」「十巻本」等として校合注記が為されている。芳野のものであろう。前掲書同様、本書も芳野旧蔵本が国立国会図書館に存する。本

書は両者の字体にやや差異があり、前掲書ほど摸写の度合が緊密ではない。ハ〇九―四―七四―三

類聚名義抄（観智院本）附別本雑部　近写（〔浜野知三郎〕）

大一一冊　底本文化七年二月伴信友写校注書入本

朱色表紙（二六・六×一九・一五糎）金砂子散し双辺刷枠題簽に「類聚名義抄仏上（中・下本・下末）（法上〈中・下〉）（僧上〈中・下〉）（下続別本）」と書さる。「類聚名義抄仏上　篇目」、「凡此書者為愚痴者任意抄也……」に始まる〔凡例〕に続いて、中扉「人一……身十／（隔一行）／類聚名義抄仏上」。三丁。各冊同様の目録外題扉あり、扉題「類聚名義抄仏中（下本・下末）（法上〈中・下〉）（僧上〈中・下〉）」。第一一冊は別本なれば後記す。扉題右に各冊目録外題あり。第二冊「耳十一……肉月廿」、第三冊「舟丹廿一……犬犭卅」、第四冊「牛牜卅一……黒皿」、第五冊「水氵皿一……山五十」、第六冊「石五十一……衣衤六十」、第七冊「示衤六十一……寸八十」、第八冊「艸八十一……金八十八」、第九冊「八八十九……隹百十二」、第十冊「魚百十三……雑百二十」。「仏上一……僧下十」迄の篇目を冠せ、「人ニン一……身シム十」迄の為頌（標目となる部首の唱え）を載す、三丁。第二冊以下為頌に当る目録部分一丁あり、声点・清濁点・朱校字あり。巻頭「類聚名義抄仏（第八冊―僧・他冊は巻題なし）／人部第一」と小題して本文に入る。無辺無界八行四段、小字双行、字面高約二三・一糎。折山表中央下部に丁付。朱濁点・声調記号あり。朱筆の鉤点・圏点が記され、信友の按語や校合が朱筆で書入らる。附箋や不審紙が貼られ、虫損箇所はそのまま写されている。天地断裁さる。尾題なく、各冊尾に以下の識語あり。第一冊、朱筆「以矢代弘賢子所蔵類聚名義抄之欠巻一冊比校如左文化十二乙亥年七月伴信友記／巻首曰／此書全部十一冊者管原是善卿相丞之父作而我朝之古書也最大切応所持全／篇松之文蔚少年之写本予伝写之為因西念寺宝蔵之常住物者也／凡例／……マデ五十四枚一冊アリサテ跋ニ曰／右十一冊之内七八九十之四冊歓喜菴御老師高田家中某令書写之者也／右十一冊之内一二三四五六十一之七冊西念寺現住慧察諸方之学友之乞受力伝／写之者也／以上　校合慧察」。第四冊第二九丁裏「観智院」。第五冊、蓮成院本と朱校あり、末に朱筆「一校早」。第六冊、末に朱筆「一校了」。第一〇冊「書本云／仁治二年辛丑九月六日於賀茂奄室交点畢凡此書者以作者自筆／草本書写之間文字前後或重〻定有紕繆歟尋清書之証本／追必可交合之　釈子慈念生年卅六歳云〻／本云／建長参年八月六日亥尅於洛陽城鷹司之辺一筆書写之／畢願以此結縁世〻開恵眼生〻得

惣持必証大菩提矣／執筆沙弥顕慶春秋廿三歳／（隔一行）／観智院」、裏に「類聚名義抄十一巻洛東一古寺所秘襲建長古本也偶得見／懇請手自摸写之今合為十冊比校定／文化七年二月　伴信友」一丁あり、「文政八酉年九月九日令書写東陽於下谷樵園／一過校合畢　大野朝臣南雲広城」の識語記さる。第一冊より、本文四四・七〇・六九・二九・六一・七六・七二・七〇・六九・六五丁。

第一一冊、扉「廾」と朱で肩書し、「雑……甘甚其」迄の目録外題を書す。第一丁表末行より第二丁裏第二行迄目録を冠せ、内題なく、「〇（朱丸）首胥（小字三行に訓み・意味等記すも省略）」より始まる。無辺無界七行四段小字双行、字面高約二一・二糎。標目に朱〇を打つのみで、朱校字はない。丁付なし。二六丁。第一冊遊紙に「大野／樵園／文庫」（陽刻）「木正／辞／章」（陰刻）二朱印摸写さる。

本書は、漢字を篇目（部首）により類聚し、音義・国訓を施し、清濁やアクセント符号を加えた単字字典で、書名は「和名類聚抄」と「篆隷万象名義」とから援用したものらしい。本東寺観智院本は伴信友が見出した現存最古の完存本であるが、新出の清水谷家蔵・宮内庁書陵部現蔵零巻と比し、大きな改編を経た別本であることが知られる。

信友の手写本は現在京都大学附属図書館に蔵され、該書には本書と異り、文化十年八月の叙があり、観智院本の被見を此年のこととしている。信友は慥かに文化十年には度々観智院に出向いており、翌る十一年には「東寺古文零聚」の校輯や「類聚名義抄字訓索引」の稿を終えている。

信友は屋代弘賢蔵の西念寺本・蓮成院本（共に零本）に依り、校合を行っている。本書の第一一冊は、題簽にただ「別本」とあるのみだが、京大本またその転写本である神谷克楨写本（静嘉堂文庫蔵）等に依るに蓮成院本の雑部である。

観智院本は貴重図書複製会叢書・天理図書館善本叢書等に影印されている。

大野広城、幕臣にして国学者。「殿居嚢」「青標紙」「泰平年表」等の出版により罪を得、天保一二年幽閉裡に没、享年五十四。ハ〇九―四―七五―一一

雅語便覧存いろから―お　江沢述明　〔自筆〕　半二冊

薄縹色表紙（二三・七×一六・二糎）貼題簽に「雅語便覧稿本」と書さる。書反古使用。巻頭「雅語便覧／江沢述明　輯／いの部」、下冊「雅語便覧巻／（隔一行）／良之部」と始まる。

左右双辺（一九・二×一三・〇五糎）、白口単黒魚尾、下象鼻に「耕霞堂」と刻する一〇行墨刷罫紙使用。上冊凡例以下八丁並下冊第九一丁以下、左右双辺（一九・三×一三・〇糎）一〇行、裏丁匡郭外下端に「月舎梓」、版心表丁に「雅語便覧　〇」と刻する一〇行墨刷罫紙使用。中縫表丁並びに〇の下に丁付記さる（但し下冊九一―一一九迄なし）。版心下部に「大学」（由清は大学中助教を勤む）と刻された、単辺（一八・九×一四・四糎）有界一〇行墨刷罫紙に「いたいけ」二行分補記挿入さる。およそ料紙を二折にし、その部分に墨を引き二段とす。朱校字、本文標記書入あり。特に「の」の項に多い。用言の活用を［クシ］の如く、眉上・欄脚に界欄を設けて書入ている。本文では後記凡例に述べる如く、活用・出典・俗訳等の項目が墨囲されている。上冊末に「凡例／部類十門」と題し、「天象日月星宿雲煙風雨寒暑災祥付時令歳月日時」から「言語語辞枕詞形状態藝光彩数量」迄の十部が記され、「書躰」として、眉上界欄に［門部］と標記、「言辞一［正字］［活用］語釈畧注［書名］巻数引文［俗訳］」と掲げ、その実際を、下段に「いはふ一斎［八］［四］神ヲイツキ祭／オマツリスル［御鎮坐］／ルヲイフ　一［乃］十はふりらか――やしろ［同］十二――みむろのますかゝみ」と例示している。次に墨囲や各符号の説明二段三行あり、引書略目に三行を隔て、眉上より、「［天］［象］付時令いろとる風いろなる雲いろなき露いほへの雲ナトノ類ハカノ部風ノ条ク［ノ］部雲ノ条ツ［ノ］部露ノ条下ニ出スいへ風いたまの風いふきおろしナトノ類風ノ条ニアルヘキモノモ詞ノ序ニ随テイ［ノ］部ニ挙ク此他ノ詞准ヘテシルヘシ」と、一行貼紙で訂記し、「いはと」以下の本文に入る。八丁。十門に分った類聚別編を為さんとせしものか。両冊巻頭に横山由清の「月の屋」朱印鈐せらる。上冊九〇（但しろ四〇から、か七〇に跳ぶ）、下冊一三〇丁。断裁のため標記やや切取られたる箇所あり。

本書は雅語（実は古語と云うべく、虫のうじ等も載る。引例は神代紀）を、語末迄いろは順に排した便覧辞書で、今の我々には仲々引きにくい。上冊末に凡例と共に別編した「いはと」から「いしま」迄の八丁は、凡例にもある如く、天象から言語の十門に分って、いろは順に類聚せんとしたものであろう。但し同じ見出語でも、語釈は必ずしも同じにはなっていない。

本書で面白いのは、「かはす交又替」「かほ顔」「むしろ」等の項で、「〇いひかはす……〇ひかりをかはす」「〇はなのかほ……〇すゝめ――」「〇さむしろ……〇すがむしろ」等、それらで終ることばも取上げられていることである。なお上冊第八七丁裏「かどのをさ」以下は項目のみで語釈が記されていない。朱校字は「いはけなし」の「は」に朱点を打ち、「わ」と右傍に記す等仮名遣いも訂し、「いわけいわけなし／此二条六丁オいをや

すく／ぬるノ下いわしノ上ニ／入ルヘシ」等と指定標記も行っている。

本帙は「おほくにぬし」迄を存し、は―わ・よ―な・く以下を欠くが、由清の勤めていた東京大学の国語研究室に、はに・ほへと・ちりぬるをわ・らむうゐのの四冊が存し、本書と同じ耕霞堂の罫紙に書された稿本である。第一冊の扉に「壬戌七八月稿」とあり、「静盧／江沢／氏蔵」の朱印の鈐せられる自筆稿と見做せるものである。壬戌、文久二年か。東大本の抹消改訂箇所や、入換えの指定箇所は、本書では直して写されており、東大本より稿次が後のようである。

本書は、述明自筆稿本を臨写した由清の写本と見ると都合は良いが、月舎の罫紙に記されたものは、或いは刊本化に向けての由清の依頼に応えた、述明の版下用の見本ででもあろうか。本写本・東大蔵本とも薄葉の罫紙に書写され、同一人の手になるかと思われる。本書の表紙は書反古が使われ、第二冊裏表紙見返に「冠服制度図考証」と書かれた反古が貼られている。反古・題簽共由清の手か。

江沢述明、松崎氏、国学者で歌人の講修の養子となる。国学・和算に通ず。明治二七年没、享年七十九。ハ〇九―四―七六

―二

言海〔校正刷〕　大槻文彦　明治一七年一二月序　大五

冊（包背装）　鉛印

後補茶色表紙（二七・八×二一・二糎）。明治十七年十二月文部省淮奏任御用掛　大槻文彦識「本書編纂ノ大意」一一項七頁、紀年題署の次に「本書、草稿全部、去年十月、文部省ヨリ下賜セラレタリ、因テ私版トシテ刊行ス。　文彦又識」とあり。「語法指南（日本文典摘録）」七九頁（但し三・四・二一・三五・三六・四九―五四・六六・七四・七六・七八欠、一〇・一一の間に「第一表動詞ノ語尾変化…法」二葉あり）、「凡例」五五項二〇頁（但し一一―一三欠）、「索引指南」二段一二項四頁を前付とし、内題「言海／あ」として本文に入る。単辺（二二・四×一五・二糎）無界三段（一段高約七・五糎）二六行に印刷さる。但し匡郭なき葉あり。活字はフトゴマ・ヒラゴマ・ホソゴマ等各種のものが使い分けられている。巻末「中田邦行／大久保初男校／文伝正興」と校者を並べ、尾題「■■大尾」、所謂るゲタの箇所「言海」と朱で校正さる。「おくがき」（「ことばのうみのおくがき」と朱で校正）六頁（以下欠）。第一冊本文一六三頁（但し九一―九四欠、七一―七四は八〇の後に綴じらる。

一五八以下未だ試し刷りで匡郭なく、行数も不等で頁付も為されていない。なお一頁分超過につき、この部分でかなり削減、編成換えが行われている。第二冊一六三―四三〇（但し三〇一・五九一・五九三・六一九の再版本校正刷分三〇一の前に綴じらる）。第三冊四三一―六五六、第四冊六五七―八六九（但し七二五―七五四欠）、第五冊八七〇―一一一〇頁。第二・四・五冊はほぼ蝴蝶装の如く、印面・裏白面と交互に開くように綴じられている。第一冊、前付は小口を貼付するもあれど、本文は蝴蝶装の如くす。第三冊は一枚二頁分を切離し、表丁（見開き左側）のみに印刷面がくるように綴じられている。第一冊遊紙に「浜埜／知印」（陰刻）「白石氏蔵書」の二朱印、帙に「浜埜／知印」（陰刻）「字曰／士行」の二朱印が鈐せられている。

本書は、前付が〔明治廿二年〕三月十二日から五月十一日迄の初校から三校、本文が〔明治廿一年〕十二月廿日からほぼ順を追って翌る四月廿七日（第一冊）、六月廿五日から十月廿日（第二冊）、同日から翌る五月廿八日（第三冊）、六月八日から十二月廿日（第四冊）、一月八日から四月九日（第五冊）にかけての初校、後付が三月廿四日（朱筆で同日「交正」とあり、墨筆で「□月廿四日再校」とある）の校正刷を五分冊にしたもの。本帙については、犬飼守薫氏に「『日本辞書言海』の校正刷について」（『日本近代語研究』一ひつじ書房刊）等の紹介があるので、御参照頂きたい。前付や後付は、初校から三校迄校次の異るものが綴じられているらしいが、本文は殆ど初校次のものであろう。但し四〇五―四〇八頁あたり、「十月十九（廿一）日再校」「三校ヲ要ス」、一〇一八頁「三月廿五日再校」とあり、次頁と共に赤での直し少く、或いは校正書入通り再校分かも知れない。始め再校と記し、初校と訂されている所もある。第二冊に綴込まれた再版本の校正四頁分は、初版と再版とで本文の最も異る部分で、犬飼氏はこの故に四頁分を綴加えたものと推定しておられる。

校正の料紙は、一部間似合紙を含み、朱墨赤青のインク・鉛筆で為され、始め大槻・中田・大久保の三名（途中、中田邦行は廿二年六月に脳充血で没）の他、一部印刷所側のものも見られる。「某月某日初校」等と識し、押印又は署名をして次の人に廻し、三人で校正を行っているが、中田（五月二日「索引指南」押捺が最終か）の没後、第二冊「か」の項以降は、大槻・大久保の二名で、大久保が徳島の中学教員として赴任した廿三年十一月以降は、新たに文伝正興と二人で校正を行っている。

大久保の校正の最後は廿三年十月廿七日の八〇二頁迄であろうか。以下十一月三日付の大槻と文伝のものとなる。校正者の署名は「文」「文彦」、印「文／彦」（角印）「オホ／ツキ」「大槻」、「中田」「大久保」「文伝」である。鉛筆で作字すべき字を記したり、六七五頁に「壷ハ壺ニ改ム／壷、壺、同字ナレトモ字典ニヨレハ壷ノ方正キヤト御考ヘラレ候、如何、当課ニハ壺ノ字無之候／ニ付壷ノ字ニテハ間ニ合兼候ヤ一寸御問合マデ。小松（印鑑）／大久保さま」の如き印刷所側の書入れも存する。本文の校正日時はほぼ連続しているが、一部間のあいている所がある。編者の側にあっては、文彦の次女や妻の死、校者の死亡や赴任、印刷所の事情等数々の障碍が重なり、組版の遅延を生む。そうしたことについては、本おくがきや発刊時の舌代等で知られ、犬飼氏の前掲論文や高田宏氏の「言葉の海へ」等の著作にも詳細に記されている。本書に書入られた日時は、製本の際書脳（のど）部になってしまった所も多く、校正紙の大いさも区々であったため、天地が断裁せられ、一部判読不能の箇所のあるのは惜しまれる。校正には切貼り、附箋等が為された箇所もある。四三三頁には「あと原稿なくさしつかへ」の墨書がある。

言海については、既にこれ迄に数々の論が存する。中でも山田俊雄氏の紹介された二種の稿本と初版本とをつなぐ存在が、本校正刷である。稿本は度々の改訂を経、校正刷から刊本に至る間にも、印刷上の諸制約から、度重なる改変が為されている。勿論初刊後にも様々な改訂が為されているが、それ以上に稿本から初刊に至る過程では、刊本化に伴う諸問題が噴出している。本校正刷を仔細に検討することにより、そうした問題を解く一つの鍵が得られるかと思う。

なお浜野氏は大槻氏の「大言海」編纂の際の助力者の一人でもあり、本略解題でも既に幾つか記したように、大槻氏蔵本の転写を為すなど、昵懇の間柄であった。本校正刷もそうした関係から手に入れたものであろう。ハ〇九—四—七七—五

中庸正釈（題簽）　豬飼敬所（彦博）　写　大一冊

縹色布目表紙（二六・二×一八・〇糎）双辺題簽に「中庸正釈　豬飼敬所」と書さる。青刷巻子本に「友月庵文庫／第五一一号／　之門／　之部／全一冊／　之内／殿村蔵本之章」（五一一・一の番号墨書、最終行陰刻）の蔵書票、表紙右肩に貼付さる。内題なく「中庸序／彦博按、……」として本文（序の正釈）に入る。朱句点、彦博に朱引。第一丁裏末行「中庸」と題

し、以下中庸本文の正釈を為す。単辺（一八・一×一二・五五糎）有界一二行、白口単黒魚尾墨刷罫紙使用。行一八、九字。朱句点・朱引・朱圏点、朱墨標記あり。巻末匡郭外に「昭和六辛未十二月求之／殿邨善一『南陽／殿村昱』（朱陰刻印押捺）」と朱書さる。三三丁。巻頭に「福田氏／臧書印」「大西臧書」「南／陽」「殿村／昱印（陰刻）」の四朱印鈐せらる。

本書は中庸の序の要語を摘録、作者の意をとり、次いで漢和の先儒の言を引き、各章の要諦を簡略に述べたもので、折衷考証の敬所らしく時代や和漢に捉われず諸儒を引くが、とりわけ履軒・仁斎を引くことが多い。ハ〇九―四―七八―一

呂氏春秋〔校正刷〕二六巻　漢高誘注　清畢沅校　塩田屯点　〔江戸後期〕　大五冊　覆清乾隆五四年四月序

刊経訓堂叢書本

香色地水鳥鯉等刷出表紙（二六・九×一九・一五糎）双辺題簽「呂氏春秋新校正」（新校正の左に「経訓堂叢書之一種」の朱印押捺さる）。表紙の裏貼りに呂氏春秋刷反古使用さる。各冊綴代右下「自一至五」「自六至十二」「自十三至十六」「自十七至二十」「自廿一至廿六」と書さる。扉（見返として貼付さるも剝れるあり）各冊左に、「再刷　自一至五　一」「再刷二　自六至十二」「再刷十三ヨリ十六マテ　三」「再刷　自十七至廿　四」「再刷　自廿一至廿六　五終」。右中央に「七十七」「七十五」、第三・四冊見えず、「六十四」と丁数記載さる。末に「江寧劉文奎鐫」とある「呂氏春秋序／漢河東高誘撰」二丁、末に「乾隆五十四年歳在己酉孟夏月吉序」の年紀ある「呂氏春秋新校正序／兵部尚書兼都察院右都御史総督湖北湖南等処地方軍務兼理糧餉加三級軍功二級畢沅撰」二丁、鏡湖遺老記「呂氏春秋附攷」七丁、「新校呂氏春秋所拠旧本」一丁、「呂氏春秋総目」九丁を冠せ、内題「呂氏春秋巻第一（―二十六）／兵部侍郎兼都察院右副都御史巡撫河南提督全省軍務兼理河道　欽賜一品頂帯畢沅輯校（二以下なし）／孟春紀第一　本生　重己　貴公　去私／呂氏春秋訓解　高氏／一曰……」と本文に入る。単辺（一八・九五×一四・二糎）有界一一行二二字小字双行。版心粗黒口双黒魚尾、中縫に「呂氏春秋巻一（―二十六）孟春紀（小題）　丁付」。巻十二第一丁のみ柱刻「呂氏春秋巻之十二」とあり。訓点加刻さる。尾題「呂氏春秋巻第一（―二十六）」。但し巻一六・一七・二三・二五にはなし。巻末尾題下に「福山藩官邸／塩田屯蔵版」の朱印鈐せらる。第一冊本文一二・一二・一一・一〇・一一丁、第二冊一一・一〇・一〇・一一・一一・一一・一一丁、第三冊一三・二三・二

一・二〇丁、第四冊一九・一九・一九・二一丁、第五冊一〇・一一・一一・一〇・一一・一一丁。巻一九の第一八・一九丁は綴違い、巻一七の第三丁は重複している。巻二〇の最終丁は、版心の小題が墨格で、匡郭外が未だ攫われていない。序第一丁に「西備福山／塩田屯／図書記」（陰刻）「津山氏／所臧記」「長門／矢島／氏」（共に陽刻）の三朱印鈐せらる。

呂氏春秋の和刻本は、江戸中期に京の文泉堂林権兵衛から、明宋邦乂・徐益孫校訂本の覆刻版が刊行されており、求版を重ね、寛保三年の、京・銭屋忠兵衛印本・安永五年の、同・近江屋庄右衛門印本等が存する。本帙はこれに次いで和刻された清の経訓堂叢書本呂氏春秋の覆刻版校正刷。始め塩田屯の蔵版（福山藩大に関わるか）、未確認ながら、長澤規矩也氏の「和刻本漢籍分類目録」に、大阪・伊丹屋善兵衛等の奥付を持つ後印本が存し、この奥付は前版の覆明刊本にも見られる。前稿㈡の和名類聚鈔の個条でも述べたが、同書・同類書を広く求版し、自肆の売捌品としてゆく書肆の営業意図が窺えるように思う。

本校正刷には、眉上書脳部から版心部にかけて（裏丁では逆）、また欄脚或いは匡郭外（一部匡郭や本文にかかり、その為、その部分の文字を附箋に書写せし箇所あり）書脳部に「阿部備中守様／浅草本願寺輪番　南窓坊」「上　牛御前別当」「御請　貝塚　青松寺」「御届書　王子　金輪寺」「伝通院／役者／上」「差紙　松平主殿頭家来　岩瀬東四郎」「無宿丈作口書写」「絵図面」「朱引絵図面」「願書」「御安産御祈禱巻数／（以下書脳部見えず）／王子　金輪寺」「奉願口上之覚　深川　霊運院」「旧記」「例書」「寺社／御奉行所　本願寺築地輪番　戒忍寺」「訴状其外書物三通」「〆／塩田屯様」「塩田屯様／堀口助三郎様／岩原市之丞様　内山小一郎（池）／香（以下書脳部で見えず）」「牢詫文」等々の文字が見られる。これは恐らく文化三年から五年、次いで七年から一四年にかけ寺社奉行であった福山藩主阿部正精に宛てた文書の表書の文字の少い部分を流用し、枚数の多い本書の校正刷用紙に宛てたものかと思われる。中に「未七月廿五日差出昨廿四日差出候書面差返り」と朱書された浅草本願寺地内長泉寺の上書の未は、辛未の年である文化八年に当たるか。第一冊の見返に使われた料紙は「上　浅草　慶印寺　酉七月十日備前守殿（備中守・備後守・長門守）江直御渡候／焼捨訴状」とある。癸酉十年であろうか。また辛未十月六日届出の大孝院の上書もある。八年か。阿部家は代々寺社奉行職に就く例が多いが、本校正刷に見られる年紀は正精時のものとして矛盾しない。

刷面と書写された文字の重なる所が数箇所あり、校正刷のため墨ののりが悪く宛も濃墨で書かれた文字が後のように見えるが、巻四や巻二六第九丁等で見ると刷が後のようである。文字面と印面が重なり、校正しにくい所数箇所は、附箋が貼られ本文が書写されている。巻九首に「此冊／再直／相済」、巻一一首「此冊／再直し／相済」、第五冊首、書脳部に「二十二マテ再直しスム」の書入があり、扉と併せ、現在云う所の再校である事が分る。小文字のアルファベットを用い、校正箇所を標記対照している所がある。

かなり奇麗に仕上っており、校正と、眉上に朱墨の標記書入が為されているが、これらは文書部分を避けて記されており、文書記載が先であることの徴証ともなる。文書の表記は印面に対し斜や逆、袋綴じの裏面（すなわち刷用紙としては文書の紙背―裏―を利用したことになる）に為されている場合もある。眉上に折跡の存するものもある。

なお文書を利用した刊本としては、丁数も多く紙も貴重であり、然も官衙の出版が多かった宋元版の公牘紙を利用したものや、故人を偲び菩提を弔うための、消息経等の存在が知られている。

用紙の大いさは異り、天地切裁され、一部校正標記の切落された所がある。両脇を切込み、折込んで注意を促した校正箇所もある。巻二〇の最終丁・巻二六第九丁は匡郭外が未だ攫われていず、第五冊には幾らか墨格箇所も見える。

塩田屯は太田全斎の甥、椀斎と交る。生没年未詳。ハ〇九―四―七九―五

好古小録二巻附録一巻　藤原貞幹　寛政七年九月刊

〔修〕（京　鶴鶏惣四郎等）　大二冊　狩谷椀斎説等書入移写本　田安家旧蔵　日本藝林叢書底本

縹色布目表紙（二六・一×一八・四糎）双辺題簽に「好古小録金石書画　乾（雑考　坤）」と刻さる。表紙右下に「田藩文庫」墨印、綴代下部に「百三十六」と朱書さる。見返なく、序以下奥付迄、前稿㈡所掲のハ〇九―一b―二七―四に同じい。序首に「稽帯楼／図書記」「田安／府芸／室印」二朱印鈐さる。本版の「舩氏墓誌」中、誌面第二行の「天皇云世奉仕於等由羅宮」、誌背「天皇云末歳次辛丑十二月三日庚寅」の第三字、云が両者共「之」に改刻されている。両字共他に比べて、小ぶりである。本書の白文の碑面の文等には、朱で訓点・訓仮名が書入られている。

本書は眉上・行間に、「椀斎曰」として椀斎説を墨書、「輪池

翁云」「小杉君云」「躬行云」「保孝按」等と朱（保孝は墨）書し、屋代弘賢・小杉榲邨・古川躬行・岡本況斎等の説を、主として眉上に書加えている。所蔵者のものと思われる無名の書入も存し、「今在宮内省」等と現所在を補記、魚養書には「往時南都ニ遊ヒテ一覧ノ序寺僧ニ訂セシニ今ハ七巻欠テアルヨシ云ヘリ」、上野国羣馬郡下賛郷（シモサノ）碑に「文中今三口ノ語ハ今日モ猶ホ上州人ノ云フ所ナリ今ハソノ上ト云ヘル意ニ用井ル也」、多■永書牘に「明治廿年六月廿三得貞幹摸刻本壱葉於待価堂故紙堆中廿四枚了刻本有菅原世長跋五條家カ」等と朱書されている。「雄云」の注記もある。

浜野氏は、本書を自身編纂者の一人であった日本藝林叢書の印刷底本とすべく、諸指定を朱（インクも交ゆ、或いは浜野氏の指定に準じて印刷所の為せしものか）書、分りにくい変体仮名や草体の漢字を右傍に朱書、同様に合字は朱点で抹消し、右傍に「シテ・コト・ナリ」の如く朱書し、「晋」を同様、「晉」の如く正し等している。書入部分で不必要な箇所は抹消、「椢斎曰」も、その部分のみ抹消して、本書に欠けているものを前掲本から移写増補している。これは本移写本が、未だ椢斎の**廈**次にわたる書入の前段階のものであり、また各人説を移写しており、そのため「某云」とした表記を、原の形の前掲本の如く戻さんとしたのであろう。椢斎以外の説も生かせるは生かし、案として自説としたものもある。「輪池翁云太和ハ唐文宗ノ号」等は「輪池翁云」を朱筆で抹消し、「案」として自説としている。出典引用箇所等にもままこうした措置が為されており、固有名を冠すべき注記ではなかろうが、やや公正を欠く気もする。「躬行云」「保孝按」には「古川」「岡本」を朱筆にて挿入、「輪池翁云」には「屋代輪池云」と朱筆にて書改め、分り易くしている。椢斎説や浜野氏案文で、眉上に既に餘地のないものは附箋に貼られて増補されている。

なお図版部分は、縮印されたものが朱ペンで通番号を記し四一枚貼付され、中の二図ほど「改版」と、図版を作り直すよう指示されている。ハ〇九―四―八〇―二

好古日録　藤原貞幹　寛政九年四月刊　〔明治〕印（京津逮堂大谷仁兵衛）　大二冊　狩谷椢斎説等書入移写本　日本藝林叢書底本

濃縹色（二五・七×一八・四糎）双辺題簽「好古日録　本（末）」。黄色地双辺見返「無仏斎先生／好古日録／此書は金石（きんせき）および古書籍古器玩等の稀（まれ）に……寛政丁己夏四月新刻初兌」。

序以下前稿㈡ハ〇九―一b―二七―四に同じい。奥付双辺「和漢西洋書籍／文部省御蔵版翻刻書／学校用書籍類／仕入売捌処／下京第五区辨慶石町／三條通御幸町西入五十六番地／㊐ 津逮堂 大谷仁兵衛」。

書入小録と同筆にて、体式もまた同じい。但し本書には小杉・古川・輪池等の説はない。小録と同じく「孝按」に「保」と朱で書入れ、翻印本として分り易いよう配慮されている。「人類学会雑誌五十四号山崎直方報」や「貞幹蔵スル所ノ金環文政二年余西遊シテコレヲ得タリ」という椋斎の注記が見られる。

本書は小録より図版が多く、一〇九枚存する。うち第二・三・一九・七四・九一の五枚が欠落し、一〇六に、誤って一〇七と番号が打たれており、実数は一〇八であったようである。ハ〇九―四―八一―二

申学士校正古本官板書経大全一〇巻首一巻 明胡広等奉勅撰 申時行校 馮夢禎閲 〔明万暦〕刊（閲 余氏） 唐大三冊 人見竹洞書入本

後補香色表紙（二四・九×一五・二糎）貼題簽に「書経大全九十（鉛筆で抹消さる）（三四・五六）」と書さる。己巳三月既望武夷蔡沈序「書経大全序」二丁、「書序」通一七丁、「書経大全凡例」「引用先儒姓氏」（第一八丁裏より）「翰林院学士兼左春坊大学士奉政大夫臣胡 広」に始まる奉勅纂脩者列銜（第二一丁裏第二行より）、第二四丁より、版心「書図首巻」と題し通五二丁、「書説綱領」通五九丁。内題「申学士校正古本官板書経大全巻之一（四）／内閣大学士 瑶泉 申時行 校正／国子監祭酒 具区 馮夢禎 参閲／閩芝城建邑 書林 余氏 仝梓／虞書／虞舜氏……」と注解、本文に入る。他巻「申学士校正古本書経大全集之二（三）」「申学士校正古本官板書経大全巻之五（―十）」。巻一・四の他校閲梓者名なし。双辺（二三・三×一三・四糎、うち上層二・四糎）無界、経文ほぼ七行一六字、注同一一行二〇字、疏二二行二〇字、但し注疏低一格。版心白口単黒魚尾、上象鼻に「書経大全（巻一首大全なし）」、魚尾下に「虞書（小題）一（―十）巻 丁付」。「朱子曰」等の各人説を墨囲とし、まま行間に反切音注が加刻されており、墨筆の訓点送仮名連合符、朱句点圏点朱引、行間眉上欄脚への朱墨の注記書入が周密である。訓みは胡粉を塗り、書改められた所が多い。尾題「書経大全一（三―十）巻終」、巻二は上層墨囲中に「二巻終」とあり。第一冊六七・六〇（但し第三〇丁を三二、第三二丁を三〇と刻す）、第二冊九二・五三・五七・七九（巻五・六、

巻末木記の如き枠のみ存す)、第三冊七八・八三・八九(第六三丁欠か)・五九丁。天地断裁、合冊本。一部補写がある。本文巻頭に「宜爾/子孫」「小野節/家蔵書」の人見竹洞二朱印鈐さる。又一印押捺さるも切取らる。

明代に欽定された四書五経大全の一で、和刻の承応二年刊五経大全本の覆刻底本となった版であろう。巻八第六九丁表は、経文の大字に木目でもあろうか、細かな布目の如き同方向の線痕が入り、面白い印面を呈している。これは内閣文庫蔵本も同様である。

全巻よく読まれ、朱墨の書入が周密で、特に訓みと語釈に詳しい。「表臣」に「トザマノ如シ」と注し、「番番良士」に「即古之謀人」と、「惟截截善諞言」に「即今之謀人」と左傍に朱書する等、よく換骨奪胎して訓み、国風に分り易く意味付けを行っている。「墳」に「土ノ性ウキテシマリナキヲ云」と注し、「耕耘樹藝以人事言」と朱書する。「孔壬」に「オホヒナル子シケ人ヲ」と右傍に墨書あり、「羽畎夏翟嶧陽孤桐」には、「羽山ノタニアイニスムキシノ羽ハ名物トス/嶧山ノミナミカハニ生スル桐モ並ヒナシ」等の注記書入が見られ、「本朝食鑑」の撰者人見必大の兄の面目が躍如としている。

書入は数手あるが、恐らく主に竹洞のものであろう。林鵞峰に学び元禄九年没、享年六十。未だ邦人撰述書の簇出する以前でもあり、書入は語釈から評・参考・衍義・大旨・論攷等にわたるが、殆どが唐人説と林家のものであろう。前代の互註の面影を保ち、「林鵞峰按」の按語もある。不審紙が貼られ、朱墨の校字も為されている。ハ〇九—四—八二—三

五　名家旧蔵本

仮字拾要(題簽)・謨微字説・字説辨誤・字説辨誤私考

〔村田〕(平)春海　(字説)平沢兎道(元愷)　(辨誤)織錦主人　(私考)清水波麻臣　写(字説以下〔渋江抽斎〕)　半一冊　渋江抽斎・森枳園・大槻文彦旧蔵

香色表紙(二四・四×一七・〇糎)貼題簽に「仮字拾要謨微字説/附字説辨誤私考/合冊」と書し、各書右肩に「春海・沢元愷・織錦・清水先生」と、撰者名朱書さる。巻頭「古言梯の誤またもれたる仮字　平春海」と題し、

こは人の問ふ度に考出てしるしおけるをこゝにあくる也古

書を広く考へは猶あまたあるへけれと今はことさらに拾ひいつるにいとまあらすかさねてうるに従ひて補ふへし

の前言を置き、「阿行古言梯におを和行に置たるは誤なり今あらためて此行にいたせり／あともひ万葉巻二……」と始まる。無辺無界一四行小字双行、字面高約一八・六糎。表丁折山中央下部に丁付あり。見出語が本文中で引かれる時、右傍に□印記さる。巻頭眉上に「無名／朱ハ直ナヲキ説」とあるように、上田直樹の説を朱筆標記、なお朱囲朱校字が存する。「千古云」等の標記もある。二六丁。首に「弘前醫官渋／江氏蔵書記」「森／氏」「大槻文庫」「文／彦」の四朱印押捺さる。諸例を引いて、鹿取魚彦「古言梯」の誤を正した書。春海は文化八年没、享年六十六。なお錦織舎と号し、辨誤の著者織錦主人は同人であろう。

次に中扉「謨微字説／字説辨誤／同私考（右肩に「清水先生」とあり）／合冊」（版心部折山にも「合冊」と書さる）あって、内題「謨微字説／兎道／沢元愷弟侯　著稿」。本稿以下抽斎筆か。

癸卯之春遽辞学職而寓甫生石浜之幽居将有所往而羈留数月矣間居無一書可読乃漫取国字書而読過已而語辞可疑極多因欲著一書以就正亦復闕考索引用故先推国字狂草破体所自以質之羽子玄氏以便行文爾

の前言を冠せ、「伊　イ者伊ノ字扁。い ハ 即以ノ草体也。」と本文に入る。無辺無界一〇行二四字、字面高約一九・五糎。表丁折山中央部に丁付書さる。訓点送仮名、朱句点、藍筆の校字があり、これは抽斎の手と見て間違いない。本文の手はやや弱いがよく似ている。「保孝按」等の朱筆標記が存する。六丁。本書はいろは四八文字の平仮名・片仮名二者の成立についての説で、その意図や撰述の事情は上掲の前言に詳しい。兎道また旭山と号し本稿㈠に既出。本編以下の三種を合せ写したものが多く伝存している。

次に「字説辨誤」と内題し、

謨微字説

此題号イカナル意ニカ不詳伊呂波ハ色葉ニテ紅葉ノ亅ナリト云旧説アレバ其説ニ従ヒテ紅葉ノ亅ヲフクミテカク名ツケラレタルニヤモシ紅葉ノ義ニ取ラレタルナラバ甚シキ疎謬ナリ紅葉ハ毛美知ニテ毛美志ニハアラス知ト志ノ渇音同シヤウニ聞ユレド此ハ混スベキ亅ニハアラズモシ唐音ニヨラレタルニヤトオモフニ字ハ唐音ツカイナレハサニモアラスシテ全ク誤也　マシテ此書ハ伊呂波ノ字体字音ヲ正サントスル書ナルニ題号ニマヅ如此ノ疎謬ノアリテハイカゞ

也

と謨微字説の題号に触れ、既に此頃混交していた四ツ仮名に関する言及が見られる。無辺無界一一行小字双行、字面高約二〇・七糎。朱校字朱引、藍筆の校字及び朱墨標記書入が存する。標記は「コノ辨多ク契冲ノ和字正濫ト同シ」「和字正濫云」「友人長崎屋新兵衛云」等とある。末に以下の跋あり、字説と本辨誤とを解する因となるので引録する。

此字説ノ一書ニ挙ラレタル説トモ大抵契冲以来諸家ノ云ヒフルシタル釈ニテ新タナル発明ハ見エズタヾ伊呂波ニ訓読ノ字アルマシキ乀也ト云フ説ヲ強テ立ラレタルト今ノ唐音ヲ挙ラレタルノミ此書ノ新意ナレド訓読ノ字無シト云フ乀ハ上ニ辨ゼル如ク伊呂波ノ本源ニ背キタル乀ニテ其説通ジガタク又唐音ニヨリテ新様ノ文字ヲ挙ラレタレド音韻ノ考索疎漏ニシテ後学ノ準拠トナシガタシ抑先生ハ終身ノ学業タヽ文章ノ道ニノミ其精神ヲヒソメラレタル乀ニテ此等ノ小学瑣事ニハ深ク心ヲモ用ヒラレズ此書モ一時ノ戯筆ト見エタリ然レバ此ハ世ニ伝フベキモノニハアラザルベシ若シ世ノ先生ヲ知ラザル人此書ナトヲ見テ此ニ就テ先生ノ学術ヲ窺テ疎妄ノ誚ヲ来サン乀先生ノ為メニ慮スベキ乀ナラズヤ

享和二年九月平沢元愷カ門生某其師ノ遺書ナリトテ校正ヲ乞ヘルニ辞スル乀ヲ得サル故アリテ一過読畢テ其誤ヲ辨ス

織錦主人

因みに「上ニ辨ゼル如ク」とは、「エノ下」と朱書し、「四十七字和草一無下取二之訓読一者上」と題された以下の個所を指す。

此説此書ノ一篇ノ主意ニテ伊呂波ノ字体ヲ新ニ製造スルニハ訓読ノ字ハ交ヘ用フベカラズ必皆字音ノミナルベシト思ハレタリト見エタリ此ハ正キ乀ノヤウナレド本伊呂波ノ字体ト云モノハワザト新ニ製造セルモノニハアラズシテ草書ヲ転ゝシテ書キ来レルガオノヅカラ一種ノ字体ノヤウニナレルモノ也……

全一四丁。

辨誤は、伊呂波ノ文句・片仮名・今ノ唐音・伊為江恵於乎ノ分別・へ即反省文・職濁音直・とちぬよね各論・咨濁用レ治・或省レ季作于今俗謬作文于之子・なゐく各論・若二草体江一本又衣字・諸鞍日記・ア者阿字之扁・古者多作レ才二亦左字草省也・支用二草体部一非レ是二云今不レ得レ施二之草部一也・め者原妙字之草

・ミシ葉各説・す者寿字之草等の各項にわたっている。

次に、末に「波麻臣」と識し、「此ほとかさせたうへりし字説辨誤といふなる書おのか許にもてかへりていとまあるひま〳〵くりかへし見はへるに誠やかの字説のひかことをたゝしあかさせ給ひしはさるものにて……」に始まる序一丁（辨誤より通一五丁）あり、裏丁後第五行より、「字説辨誤私考／四丁ウ　契冲ハ千子井等ノ云ヽ　十丁ウサテ片仮字ノ井字ヲ云ヽ／私考……」と本文に入る。無辺無界一〇行小字双行、字面高約二〇・〇糎。表丁折山中央下部に丁付。朱並びに藍筆の校字、墨の追考標記、「辨誤にも既にいえり」等の藍筆標記がある。巻末に「享和壬戌季冬一日稿」の年紀が識され、「鈔写允／畢読／誦士遍」の朱印押捺さる。通一八丁。字説に対する辨誤の、更なる補足考証で、春海の弟子泊沼舎清水浜臣のものであろう。薄葉紙を用い合冊され、入紙が施されている。題簽・小口書とも抽斎の手か。

ハ〇九―五―一―一

孝経直解〔三〕巻　写（〔渋江抽斎〕）　大一冊　摸写永禄一二年一二月写本　渋江抽斎・森枳園旧蔵

褐色布目表紙（二七・二×二〇・〇糎）貼題簽に「孝経直解」と書さる。巻頭「〇（朱丸）孝経直解巻第一（孝経中央に□朱引、題下に孔安国に就き以下の小字双行注あり、但し朱引省略―孔安国者（者は朱筆による増校）、孔子十一世之孫、漢武帝之国子博／士也、字孔国武帝之时臨淮大守卒（テウス）、此伝蓋（ハシ）／与昌同／时之、）」と題し、朱〇を打ち古文孝経序の直解より始まる。毎半葉単辺（二一・九五×一六・五糎）に上層を加う、高約三・八糎。八行二四字小字双行。訓点送仮名連合符、標目の頭には朱の〇、が打たれ、朱の句点鉤点、朱引が存する。眉上行間に枳園の朱（一本代赭色）校字、朱墨書入が為されている。これは後述する如く、一本と樋口本との対校で、樋口本は巻一のみ。また巻一には眉上に一から十迄の名数標記が朱書されている。尾題「孝経直解終（孝経直解に□朱引、終に「註此字異本在（ニリ）」と墨書、また始め墨筆、朱で其をなぞり「空一行／直解終」と尾題箇所を校せり）」。

次に「、（朱点）五等・〇（朱丸）開宗明義章第一……〇（朱丸）喪親章第十八・〇（朱丸）名有五品」等五十四條ほどの標目を直解、尾題「、（朱点）孝経正義終（孝経正義に□朱引）」。

次に「〇（朱丸）古文孝経（□朱引）／孔氏伝（朱引）／、（朱点）開宗明義章第一」と題し、孔伝本文の注解為さる。尾題「〇（朱丸）古文孝経之終」。欄外に「于时永録十二己巳季十

二月十三日牛刻昼(ママ)写早」の本奥書そのまま写さる。一〇、五、一九丁。首に「弘前醫官渋／江氏蔵書記」「森／氏」、巻末に、「問津館」の朱印押捺さる。

孝経直解は、孔伝を基に隋劉炫の孝経述議を割裂挿入し、室町初期に邦人の編述したもので、巻一を孔序の注解、巻二を主として宋刑昺の正義による標目章旨の注解、巻三を孔伝本文の注解とする。

本書には、巻頭書眉に朱書された

○一本先年自京師携来古文孝経巻子臨抄本也

○樋口氏所蔵古鈔本／孝経直解序注／全存以為一巻巻末云／江州北惣持寺末寺／八幡宮放生寺之住／僧貞印之

弘治三年二月廿七日／西塔南尾善住院／二位

立之案江州云〻／墨色稍古／弘治云〻墨色淡／而筆跡拙矣／今以朱筆校之／庚辰孟春／七十四翁枳園

の識語の通り、代赭と朱の枳園の校字書入が為され、巻一尾題上の書眉には、「樋口本止于此」の標記が見られる。枳園の標記書入注には、「策（連接線を引き『二尺四寸』）者杜預曰大支肩之／於策小支簡（連接線を引き『一尺二寸』）牘而已」等の書誌学に連関する記載も見られる。

本写本の底本たる永禄一二年本は現所在が知られぬが、弘治三年写の樋口本は、今東洋文庫に存する。本書に就きては、斯道文庫論集第六輯に校勘の一本として用いられ、阿部隆一氏の解題が備わる。ハ〇九―五―二―一

新刻古今碑帖考　明朱晨編　胡文煥校　写　中一冊　薄様紙　渋江抽斎旧蔵

砥粉色表紙（一七・八×一二・一五糎）双辺刷枠題簽に「古今碑帖考　全」と書さる。錦雲堂監製の紅刷八行罫牋（紅紙）に「渋江抽斎名全善字道純抽斎其号也……（末に『右見于人名辞書』と書さる）」一葉挿入さる。「周碑四、二、（朱）／……国朝碑法帖附、一一九、七四、（朱）／計　一、三五四、」とある〔目録〕一丁、銭唐胡文煥徳父／識「古今碑帖考述」一丁を冠せ、内題「新刻古今碑帖考全／朱　晨　長文　編輯／胡文煥　徳父　纂校／○（朱丸）周碑四」と小題して本文に入る。単辺（一三・三五×八・六糎）有界八行、黒口の墨刷罫紙使用。行一八字小字双行。表丁中縫下部に丁付書さる。朱墨校字、朱圏点あり、小題や碑名の頭に朱丸・朱点打たる。八一丁（但し第二一丁欠）。序首に「弘前醫官渋／江氏蔵書記」「杏圃／珍賞」の二朱印鈐さる。

時代分け、分類別の碑目。胡文煥は明末万暦頃、新刻を書名

に冠せ、自身輯校した「百家名書」や「格致叢書」の出版で知られる。本書も格致叢書の一に加えられ舶載、紅葉山文庫（現内閣文庫）に収蔵され等している。「魏貞ノ貞ハ／徵ノ誤乎」等とある挿入紙が挟込まれているが、浜野氏のものか。ハ〇九―五―三―一

時還読我書〔二〕巻存巻上附時還読我書捷見　〔多紀茝庭〕（安叔）　（捷見）森〔枳園〕（立之）　写（捷見森枳園自筆）　半一冊　天保一〇年一〇月渋江〔抽斎〕手校本

紺色表紙（二三・二×一六・三糎）単辺題簽に「時還読我書乾」と書さる、枳園の筆。「時還読我書捷見　以医八事上ノ廿三医事朱子上ノ文集三七……須水蛭上ノ十八……／（隔三行）／右捷見森立夫立之従津久井県録寄／丁未除日黙隠主人（朱印）」のいろは引事項索引六丁を冠せ、内題「時還読我書巻上」。末に「法眼安叔」と題署せる前言を挾み、「日本後紀巻第十七、大同三年五月ノ條ニ、甲申…」と本文に入る。枳園自筆の捷見は、左右双辺（一九・三五×一三・五糎）有界一〇行、線黒口墨刷罫紙使用。本文は無辺無界一〇行二四字小字双行、字面高約一七・二糎。表丁折山中央下部に丁付。抽斎による藍点藍引、藍筆の校字標記書入が為されている。尾題「時還読我書巻上」。尾題の前行下部「天保十年十月十九日校読一過（朱印「勤」）」の抽斎校合藍筆識語あり。四九丁。捷見と内題の題下に「弘前醫官渋／江氏蔵書記」の朱印押捺さる。

本書成立の事情は安叔の前言に詳しい。

余平生視聴スルトコロ、苟後攷ニ資アル者ハ、必随筆箚記メ、積テ数十紙ヲ得タリ、固ヨリ敢テ大方ノ観ニ供スルナラス、因テ陶詩ヲ摘テ、以テ其書ニ顔シ、復コレヲ繕訂メ、篋衍ニ蔵ム、噫亦以テ自娯ムニ足レリ、屠維大淵献ノ歳、四月朔、暁起メ書ス、法眼安叔

既に本稿で何度も述べた随読随抄の読書箚記である。幾つかの箇條を摘録する。

越後新潟ノ辺ニ、一種ノ病アリ、土人海ニ近キ河畔ニテ、草茅ヲ刈トキ、身中忽ニ虫ニ螫ルヽ〻アリ、其虫至テ細ク、毛髪ノ如シ、螫ル、トキハ寒熱ヲ発シ、恰傷寒ノ如シ、土俗コレヲ呼テツヽガトイフ、前年ハ不治ニ就モノ多カリシガ、近来ハ治方ヲ覚ヘ死ヲ免ル、其薬ハ、套剤中ヘ蛇蛻ヲ加用ル〻ナリト、菊池退蔵ノ話也、軒邑世緝イフ、此沙蝨ノ類ナラン、其螫処ヲ瀉血メ愈ト聞リトゾ、又弟子速水草

玄イフ、近頃ハ白砂糖ヲ嚼テ傅ケ、又内服セシメテ必験アリト、

野鼠の耳に寄生し、人等の吐く息炭酸ガスに反応して移り来る、阿賀野川畔等に多い恙虫病の記載が見られる。奥州平のクサケやナベカブリ（下所収なれば、捷見に見ゆるのみ）、ハシカ・疱瘡・コロリ等の、風土病・奇病・流行病についての記述も多い。

是歳（文政庚辰―三年）ノ春、深川寺町辺ノ一刹、其名ヲ忘ル、堂ノ上ニ年来巣ヘル双鶴アリ、其雌久ク病トミヘテ巣ヲイデス、雄ノミ外ヘ出シガ、数十日還ラス、其中ニ雌死タリ、雄日ヲ経テ羽毛モソコ子、憔悴シタル体ニテ、草根ヲクワヘ還来リシカ、雌ノ死タルヲ視テ、驚タルヤウスニテ、亦絶シタリ、僧侶登リテコレヲ検スルニ、朝鮮人参ノ生ニテ葉ノツキタル、シカモ肥大ナルニテアリケルトゾ、鳥獣トイヘトモ、薬物ノ理ヲ知ㄱ、此ノ如シ、万物ノ霊トメ、其事ヲ業トシナガラ、其理ニ明ナラザルコソ、耻カシケレ、

原雲庵ハ、六七十年前ニ、都下ニ行レシ医也、奇思アリシト、嘗テ中橋辺一商ノ妻ノ病ヲ診メ、反テ其夫ニ薬用セヨトイヘリ、夫愕テ其故ヲ扣ニ、汝カ婦ノ病、慾事遂サルニ得タリ、汝必ス陽道痿弱ナルベシト云シカバ、夫屈服メ薬ヲ乞シカバ、因テ処療メ、妻ノ病モ勿薬メ愈タリトゾ、

一俚談ノ書ニ、医者二三歳ノ小児ヲ診メ、酒毒也トイフ、病家甚怪テコレヲ問ニ、彼医イフ、其証酒毒ニ疑ナシ、必ス乳母ノ酒ヲ嗜ナラントテ、コレヲ糺スニ果メ然リ、因テ小児ヘ鮮酒ノ薬ヲ与テ、ソノ病頓ニ愈タリト、此原雲菴ノ陰萎人ノ妻ヲ診セシト、其事相類セリ、

珍談奇話も多く、摘録枚挙に暇がない。

文中「余嘗テ顔師古匡謬正俗ヲ読ニ、……コレラ錦城先生ニ質スニ、……」「狩谷棭斎ノ云、」等の語が見え、井上金峨門の幕府医官桂山の男**莅**庭の資質がよく窺える作物である。先考や祖先考藍渓に言及する記述も多い。**莅**庭元堅、安政四年没、享年六十三。ハ〇九―五―四―一

秋風餘韻・伯民先生詩集　稲垣〔寒翠〕（茂松）　（詩集）〔会沢正志斎〕（伯民）　嘉永七年七月写　（詩集）

写　半一冊　大田南畝旧蔵印妄補ヵ

浅葱色表紙（二四・三×一六・八糎）左肩直に「秋風餘韻完」と書さる。天保三年壬辰冬美作、石恋畦史題乎岩城平之客舎、「秋風餘韻序」一丁を冠せ、内題「秋風餘韻／美作津山　稲

垣茂松木公」。無辺無界一〇行二〇字小字双行、字面高約一七・三糎。朱句点、訂字に朱点を打ち、墨筆にて標記す。注標記書入らる。末遊紙に「嘉永七年七月上浣写之」と記さる。本文九丁。序首に「河井／氏印」「南畝」陰刻二朱印、末に浜野氏「穆如山荘」朱印押捺さる。本書は、序に「僧某、白川秋風詞、人口膾炙、……今茲壬辰七月、予有東奥之行、……秋風既起矣、……而悲喜之功為韻為歌、亦一焉無不為秋声、今輯之、成一巻、頼以秋風餘韻、……此出於実境者也、」とある如く、天保三年七月（巻頭の詩「七月既望暁雨甚、買笠簑発我孫子駅、」と題さる）武城から東奥行の折の詩を輯めたもの。稲垣寒翠、古賀侗庵門にして津山藩儒。天保一三年没、享年四十一。

次に「伯民先生詩集／塞下曲戊午」と題して本文に入る。無辺無界一三行二四字小字双行、字面高約一七・九糎。書写の体式等しからず、第一八丁一二行、第一九・二〇丁一一行。第一五―二〇丁料紙小さく二二・九×一四・九糎ほど。朱句点を施す。標記書入あり。二一丁。首に「河井」朱印鈐さる。伯民を字とする儒人は多いが、「桃蹊翁八十寿詞」や「壬午初冬詣瑞龍山、謁　先君墳、及夜夢、与幽谷先生論時事、語及　武公事、悲泣嗚咽、不能復言、忽然而覚、因賦一首、」の詩、「公駕臨史館」「公臨彰考館」等の語句から、水戸藩儒会沢正志斎と知れる。なお桃蹊翁は、天保八年八十二歳で没した同じく水戸藩儒石川氏であろう。「将入江戸遇（連接線を引き『過カ』と校さる）松門余襄在江戸十八年故有此作」と題された詩もある。朱丸を打ち「西遊詩稿」と題された詩の前言には以下の如くにある。

文政壬午夏与宇佐美公実飛子健議登富嶽遂以六月十一日起程歴武蔵相摸甲斐以二十日登嶽二十二日上絶巓帰路過駿河訪祖先遺跡歴覧豆相諸名区以七月初五日還家廼録所得詩若干首聊示同好諸子以供盃酒之雅話云

会沢正志斎、文久三年没、享年八十二。首に南畝の蔵印が捺されるが、大田覃は文政六年、七十五で没しており、書写年の嘉永七年七月を信ずれば妄補であり、南畝印を信ずれば、書写年が妄となる。印譜で検する限り大田覃の蔵書印ではなさそうである。写本自体が上乗のものではない。ハ〇九―五―五―一

新撰六帖題和歌　衣笠家良等　万治三年二月刊（〔京〕中野五郎左衛門）　大六冊　文政一年五月屋代弘賢校

合本　不忍文庫・阿波国文庫旧蔵

紺色表紙（二七・五×一九・三糎）双辺題簽に「新撰六帖一（―六）」と刻さる。第二冊以下、表紙右肩に「共六／コミ」と

朱書された貼紙あり。「新撰六帖題和歌目録」七丁、「作者次第」一丁を冠せ、「新撰六帖題和歌第一（一―六）帖」と題し、各帖目録一丁（第五・六帖二丁）を挟み、「はるたつ日　家良／くれはてゝ幾日もあらぬ年の内に猶いそきける春はきにけり」と本文に入る。歌題の前に、藍筆にて「新撰六帖題和歌／第一帖」と書入らる。単辺（二二・五×表裏通三四・二糎）無界一一行。裏丁書脳部に一（一―六）ノ丁付と刻さる。なお「イ某」として、異本との校合が傍刻され、歌頭には合点が施されている。巻末第四〇丁裏に木記「万治三庚子年仲春吉旦／中野五郎左衛門刊行」。次に作者と詠次、以下の如く刻さる。一丁（藍朱の異本校合書入あれど、省略）。

女房（前内大臣衣笠家良）　寛元々年十一月廿一日始之
同二年三月廿五日詠之訖
前藤大納言　寛元々年十一月十三日始之
同二年二月廿四日詠之
九条入道三位　寛元々年二月六日始之
同二年六月廿七日詠之
前左京権大夫　寛元々年十一月廿四日始之
同二年正月十三日詠之
入道古大辨　寛元々年十二月廿一日始之
同二年三月廿五日詠之

因みに、首に冠された「作者次第」を示せば、

作者次第　　点色
衣笠内大臣　家良公　紫
前藤大納言為家　号中院入道　黄
九條三位入道　知家　赤
左京大夫行家　又云信実　青
右大辨入道　光俊　黒
已上五人各除我歌加点四首
題　五百二拾七（以下二行朱書入）
哥　二千六百三十五首

各帖本文二八・二三・一七・六・三三・四〇丁。首に「庸／雄」「不忍文庫」「阿波国文庫」「杉園臧」、末に「阿波国文庫」の各朱印、第六冊裏表紙見返に「松寿堂」の陰刻墨印鈐せらる。なお第四冊の表紙裏貼りに、和刻本漢籍の刷反古が使用されている。

古今和歌六帖の歌題に仿った家良等五名の詠歌に、相互に批

点を加えて成った類題和歌集。天象以下の部類は、漢詩文集の部類と同様漢和の類書等のそれが影響していよう。

書入は、巻末作者付の裏丁に「右文政元年五月廿一日犢庫本を以校合了」と藍書される如く、磐城平藩主内藤風虎旧蔵本に依ったものであろう。藍朱の両筆で異本注記が為され、五者の批点は、家良紫・為家黄・知家赤・旧説なれば行家（今、信実と云わる）青・光俊黒の合点で記される。刻本は墨一色刷のため、本文巻頭を前述例示した如く、合点の下に作者名の始めの一音をとり、片仮名表記されている。

不忍文庫主屋代弘賢輪池、天保一二年没、享年八十四。蔵書家、和漢の考証に秀れ、椛斎の師でもある。杉園小杉榲邨、阿波の産。明治四三年没、享年七十七。ハ〇九―五―六―六

梁塵愚案鈔二巻　〔一條兼良〕　元禄二年九月刊（京林長左衛門・浅見吉兵衛）　半一冊　岸本由豆流旧蔵書入本

縹色表紙（二二・四×一五・七糎）下冊貼題簽に「神楽催馬楽／梁塵愚案鈔／岸本朝田家珎蔵（神楽催馬楽に三字ほど空け）」と書さる。上冊右肩「四十五」と朱書さる。巻頭「梁塵愚案鈔巻上（下）／神楽／庭燎／み山には霰ふりにし外山なる正木のかつら色つきにけり」と本文に入る。巻下催馬楽。単辺（一八・八×一三・二糎）無界一二行、小字双行。版心白口単黒魚尾、中縫に「梁塵上（下）」、下象鼻に丁付。最終丁表末行「元禄二己巳年九月中旬洛陽書林　浅見吉兵衛　林長左衛門」の刊記あり。上冊二六、下冊二四丁。巻首に「朝田家蔵書」「稲垣家／所臧記」二朱印鈐さる。上冊末に「武州日本橋／川勝通志堂」の亞字型墨印押捺さる。

本書は、上冊見返に「奥書ヲコヽニ」として、

右神楽之秘註滞峰於中院中納言以正本令書写数度校合／入落聞等尤可為正本焉

康正元年九月十日　権中納言有俊

件正本依応仁之年天下之兵乱預置者也十一処令紛失／雖為遺恨無力次第也仍以此本可准正本者也

文明元年八月五日　釈有蟠

と書入られた如く、楽の家であった綾小路有俊（後薙髪して有蟠）の儒めに応じ、兼良の撰述した神楽歌と催馬楽の注解書である。書名は、当然劉向別録等に見える梁塵を動かすの語から、先例の梁塵秘抄の如く歌・歌謡の意に用い、「愚案」として解注するをそのまま採っている。

「契冲云」「真淵云」等国学者の注解や、「重世按」「信胤按」等の按語が朱墨で眉上行間に書入られ、校字も為されている。天地断裁され、標記がやや切取られている。

本書には、刊年はそのままで、書肆名を削去し、「大坂心斎橋南壱町目／書林　松村九兵衛梓」と加刻した後印本が通行している。この題簽には、双辺で「新板梁塵愚案抄　上（下）」とある。なお本版以前に、別版の寛文八年一一月刊（〔京〕　書林小兵衛）大本二冊が存する。

岸本由豆流、伊勢朝田氏、幕府弓弦師岸田家を継ぎて名とす。弘化三年没、享年五十九。ハ〇九―五―七―二

広韻（大宋重修広韻）五巻　宋陳彭年等奉勅重修　清康熙四三年六月序刊（呉郡　張氏沢存堂蔵板）　唐大五冊

覆常熟毛扆蔵〔宋〕刊本　伊沢蘭軒・狩谷棭斎等旧蔵

後補紺色空押菊華文表紙（二六・八×一八・〇糎）双辺刷枠題簽に「宋本広韻　上平巻一（下平巻二・上声巻三・去声巻四・入声巻五）」と書さる。封面左右双辺「張氏重刊／宋本広韻／沢存堂蔵板」（隷体）と刻され、上部中央に双龍文の「進呈／御覧」、初行右下に「呉淒／張氏」の朱印鈐せらる。康熙四十有三年六月秀水朱彝尊書「重刊広韻序」一丁、旧史氏松陵潘耒書「重刊古本広韻序」三丁を冠せ、「大宋重修広韻一部／凡二万六千一百九十四言／注一十九万一千六百九十二字」と経注字数を刻し、「準景徳四年十一月十五日」「又準大中祥符元年六月五日」の牒、時歳次丁丑大唐儀凰二年／前費州多田縣丞郭知玄（欠筆）拾遺緒正更以朱箋三百／字其新加無反音皆同上音也の〔序〕、于時歳次辛卯天宝十／載也「陳州司法孫愐唐韻序」全六丁（但しこれらは本文と通丁）を置き、「広韻上（下）平声巻第一（二）」「広韻上（去・入）声巻第三（一五）」と大題、目録を挟んで本文に接続する。左右双辺（二〇・八×一五・〇糎）有界一〇行小字双行、小字行二七字。版心白口単黒魚尾、上象鼻に大小字数、魚尾下に「韻上（下）平（韻上〈去・入〉声）　丁付　刻工名」刻さる。白文。宋諱欠筆さる。尾題「広韻上（下）平声巻第一（二）」「広韻上（去・入）声巻第三（四・五）」の後、「新添類隔今（今字巻三・四なし）更音和切」題署共二行あり、但し巻五は、代りに「双声畳韻法」（通五三丁）を置く。末に、呉郡査山六浮閣主人張士／俊敬識刻書本末於後の〔跋〕あり、版心下部に「沢存堂」と刻さる。巻一通六一、巻二―五一、巻三―五三、巻四―五四、巻五―本文五〇丁、巻五の三三・三四・三六・三九―四二・四五―五〇・五二・五三刻

工名なく、墨格。首に「伊沢氏／酌源堂／図書記」「小学乃家」「月の屋」、末に「椹斎」「狩谷／望之」（陰刻）「字／卿雲」（陰刻）「湯島狩／谷氏求古楼／図書記」の朱印鈐せらる。

本書は序跋に依るに、常熟毛氏汲古閣蔵宋刊本「大宋重修広韻」を影抄し、欠けていた一帙を崑山徐相国家の宋鋟本の影写で補い、両者を勘対詳審、康熙癸未歳の夏五より甲申秋孟に竣功し、呉郡の張士俊が自ら沢存堂で蔵板刊行せしもの。欠筆や刻工名もそのままに覆刻され、その刻工名から、静嘉堂文庫等に蔵される寧宗期覆宋刊本を底本としたかと思われる。底本自体既に何度かの覆刻を重ねたものであろう。一〇行本は、例えば「静嘉堂文庫蔵宋元版図録」に、覆刻関係に係る二種の図版と解題が収められている。

参考迄に、本版の刻工名と欠筆を略記すれば、

王玩　王宝　王恭　方至　方堅　朱玩　余敏　李倚　李倍
何昇　何典　何澄　宋琚　沈思忠　沈思恭（思恭）　呉志
呉益　呉虚　呉梓　呉椿　金滋　高異　秦暉　秦顕　曹栄
張栄　陳寿　陳晃　陸選　趙中　劉昭　顔彦

なお刻工名なき丁、黒口の如く墨格と為す丁あり。

玄弦…朗敬螢…竟鏡…弘恤…殷慇…匡筐…胤炅禎貞…徵懲…曙署樹桓（恒絙…）等

但し縣讓の類、並びに高宗以下の宋諱（構の類）は欠かないようである。

本文には、一連の同音字の前に○を刻して区分としている。「双声畳韻法」第五二丁表末二行や、同丁裏第二行に墨格がある。八〇九―五―八―五

万葉用字格　春登上人　文化一五年二月刊　〔明治〕印

（東京　文淵堂浅倉屋久兵衛）　森枳園書入本

朱色空押草花文様表紙（二六・〇×一八・三五糎）単辺題簽に「万葉用字格」。見返「春登上人著／万葉用字格／東京書林文淵閣蔵」とあり、「表簽題五字狩谷椹斎所書」と墨書、浜野氏の筆に似るも、枳園の手ならむ。時（トキ）／者文化乃（ハブンクハノ）十餘四（トヨマリヨ）年云年（トセトフトシ）正月（ムツキ）／桑門春登記「万葉用字格序」三丁、文化十五年二月狩谷望之〔序〕二丁、春登ふたゝひ識「例言」三丁を冠せ、内題「万葉用字格／○阿部」と本文に入る。自序首、眉上に「此序米庵河／三亥所書」の、椹斎序首、眉上に「此序実夏蔭／作文而望之女／於孝書也／（以下低一格）此説恐非此／書上木之時／孝女尚是／総角此書／即夏蔭所／書也」の枳園の標記書入あり、自序末に「春登上人時宗の僧なり甲州都留郡西念寺住持に

て／本人清浄光寺の宗務に参し晩年京都聞名寺に転住し／天保中示寂　郷貫并歿年月等未詳」の朱筆書入が存する。単辺（二〇・八五×一四・八糎）無界九行小字双行。版心白口、「㋐（一㋐）　用字　丁付」。片仮名にて振仮名。尾題「万葉用字格終」。第四三丁裏に「文化十四年正月刻成／同　十五年二月発行／東京書林／神田区松住町　島屋平七／浅草区北東仲町　浅倉屋久兵衛」の刊記がある。四三丁。

本書は、あいうえお順に、万葉集の用字を、正音・畧音・正訓・義訓・畧訓・約訓・借訓・戯書の八類に分ち、考証排列したもの。朱墨の標記書入が為され、補説が述べられている。「立之案」の案語があり、一見浜野氏の移写の如くに見えるが、枳園筆としてよいかと思う。

題簽や序の筆者につき、当時の事情通でなくては知り得ない情報が記されている。因みに椛斎二女たかは文化七年生れ、序の年次には八歳。後年その手跡が、椛斎によく似ると称せられた。

なお本版の刊記は入木で、管見の及ぶ所、刊記・見返共に無く、「和書部　万笈堂英遵蔵板目録」一二丁を附するものが初印で、次に本書と同じ見返が附き、第三行を「江戸書林万笈堂英氏蔵板」、同刊年の次に「江戸書肆／本石町十軒店／万笈堂英大助」とするもの。見返第三行を「江都書林／英文蔵板」とし、刊記を「三都書林／京都三条通堺町　出雲寺文次郎／大坂心斎橋筋博労町　河内屋茂兵衛／江戸下谷御成道　英文蔵求板」とするもの（和泉書院より影印さる）等が続く。本印本見返第三行の「東京書林」は、前印本の「江都書林」の江都の部分を削去、入木したものである。（補記）

春登上人、天保七年没、享年六十八。ハ〇九―五―九―一

応仁記二巻　寛永一〇年一月刊　大一冊　覆古活　市野迷庵・森枳園旧蔵

香色表紙（二六・九×一七・九糎）左肩直に「応仁記全」と書さる。「応仁記目録」に一行を隔て「序」（第一丁裏第四行より）合一丁、「応仁記巻之上（下）／前所レ謂野馬台ニ。丹水流レ尽テ後、……」と本文に入る。双辺（二二・五×一六・二糎）無界一二行、版心粗黒口双花魚尾、中縫に「応仁記上（下）　丁付」。漢字片仮名交り文。句点訓点送仮名振仮名連合符加刻。尾題「応仁記巻之上（下）」、巻下尾題より一行を隔て「寛永十年孟春吉旦」と刻さる。巻上通二八、下二六丁。首に「寛／済」（墨印）「江戸市野光／彦臧書記」「森／氏」、末に森

氏「問津館」の三朱印押捺さる。

本書は、梁の釈宝誌作とされる、実は邦人撰述の、野馬台詩の末六句に依る史観の下で見た応仁乱の記録で、元和寛永頃に刊行された古活字版の覆刻本。裏表紙見返に乱筆ではあるが、「文政丁卯春日遊于　京師／山崎天王山下書肆得ニ此書ヲ／光彦」の購得識語がある。本文中には不審紙が二箇所ほど貼られるのみで、書入の類は存しない。

迷庵については、前稿(一)で触れた鈴木亀二氏の著作に詳しく、本識語についても言及が為されている。実は文政に丁卯の年なく、己卯二年か丁亥十年の誤りと思われるが、迷庵は九年に没している。文政二年は、椧斎が慊堂・迷庵と連立ち、如月二三日に江戸を発足、伊勢を巡り、弥生一四日京師着、二八日には花の吉野に游んでいる。恐らく此次の購得であろう。乱筆と干支の誤り、春の酔餘か、或いは晩年中風の発作を得、此刻を懐しんでの仕業故でもあろうか。ハ〇九―五―一〇―一

和名類聚抄考証一〇巻　〔狩谷椧斎〕　近写（〔浜野知三郎〕）　大二冊　移写森約之・木村正辞等標記書入本

朱色表紙（二六・九×一九・一糎）金砂子散し双辺刷枠題簽に「和名類聚抄考証　上（下）」と書さる。扉左に「和名類聚抄考証　上（下）巻」。双鉤隷体「孝経者／弘門敬／人最第／一之書」一枚挟込まる。各巻「校譌」を冠せ、「序」校譌共一丁を挟み、「和名類聚抄巻第一……／源順撰……」と校合考証を為しつつ本文に入る。他巻内題なく、全て朱筆にて「和名抄考証三（―五）末」「和名抄考証六（―十）」と書入らる。無辺無界一〇行小字双行、字面高約二一・〇糎。まま朱句点、朱墨校字・書入・挿入線・入換線・抹消等輻輳し、度々の訂正の為されたことが窺える。「森約之云、（朱引）」「正辞云」等の標記あり。上冊〔一〕天地部人倫部（校譌より通）八丁、〔二〕形体部疾病部術藝部一〇丁、三末（表半丁白紙）居処部舟車部珍宝部布帛部五丁（うち異体字辨一丁）、四末装束部飲食部器皿部燈火部一三丁（うち異体字辨三丁）、五末調度部一六丁（うち異体字辨七丁）、下冊六〔同〕一〇丁（うち異体字辨四丁）、七羽族部毛羣部八丁（うち異体字辨第六丁裏より）、八龍魚部亀貝部虫豸部九丁（うち〔異体字辨〕五丁）、九稲穀部菜蔬部果蓏部八丁（うち異体字辨三丁）、十〔同〕三丁草木部二丁（うち異体字辨一丁）。

本書は椧斎畢生の名著和名類聚抄箋注に至る前稿で、標記に其名の見える木村正辞蔵本を大槻文彦が影写させたものであろ

う。前述の和名類聚抄附録と共に、大槻氏が珍書保存会から謄写刊行している。本書に於ても既に屢次に及ぶ改訂の跡が見られるが、撰者梜斎は、没する直前迄その改訂の筆を止めなかったのである。

本書校譌首に、次の如く云う。

所拠京本、時有譌脱、今従別本改正、別本之誤、二本以上同者、及活字本刻版本誤者、亦附載于此、但悉掲原字以不没其蹤恐以是為非之謬僕之浅学或有金根之誤、希正於後之君子耳、

校譌に本文の出入、異体字辨で字形の差異を述べ、標目となる語を摘録、考証を行っている。なお森立之校刊本「和名類聚抄箋注」には、活字翻印の困難なこともあり、校譌と異体字辨の部分は採られていない。ハ〇九—五—一一—二

字鏡集二〇巻存巻一三—二〇　近写　大四冊（仮綴）

大槻文彦旧蔵

本文共紙表紙（二八・〇×二〇・一糎）第一・二冊右下に「校了」と朱筆小字にて記さる。巻頭「字鏡集十三（—二十）／人躰部下骨血力心十髪音尸ナ／骨部　一百三十二字」と題し、「骨コツ 同ホ子正ウヤマウ …」の如く、本文に入る。第一四の前に、中扉単辺「字鏡集十四」と書し、右に「万／十六字」と朱書、次に「字鏡集十四老扩夕言食鹵耳」の目録一丁あり。無辺無界六行小字双行、五、六段に書さる。字面高約二二・二糎。第一八のみ表丁折山部中央下方に「〇丁付」。朱墨声点清濁符、朱校字。虫損部もそのまま

に摸写さる。尾題「字鏡集十四（十五・二十終）」、第十四の尾題下に「一校了」と朱書。第二〇の二九丁裏より、「四声綱目百十五／平上去入」と題し一丁半、末に「一校了」と朱書。第一冊第一三—二九、一四—三〇、第二冊第一五・一六各二八、第三冊第一七—三二、一八—三六、第四冊第一九—三七、二〇本文二九丁。首に「大槻茂雄蔵」「大槻文彦蔵」二朱印鈐せらる。

本書は、天文十六年の識語ある字鏡鈔の大幅な改編本かと考えられている。ハ〇九—五—一二—四

字鏡集二〇巻存巻一—一四・一七・一八　近写　大八冊

摸写松平定信旧蔵本

香色表紙（二七・二×二〇・〇糎）。見返に書反古使用さる。裏丁より見開で、「一天雨日月雲風夕旦」より廿迄の目録二丁（実質裏表見開）を載せ、末に「右字鏡集二十巻之目録終」。「字鏡集一／天象部　天雨日月雲風夕旦／一天部　一十四字……」の朱墨套印四段一・二頁一葉の〔希覯典籍蒐集会〕石印試刷挟込まる。内

題「字鏡集一（―十八）／天象部天雨日月雲風夕旦／天部一十四字」と題して本文に入る。無辺無界六行五、六段小字双行。字面高約二一・四糎。巻一・四・一八は折山表丁に○を打ち小字で丁付、巻六・九・一一はやや大字で丁付のみ記さる。朱墨声点、朱鉤点・朱校標記あり、不審紙が貼られ、墨筆抹消が見られる。但し第四冊、第六冊巻一二、第八冊巻一七には朱筆書入なし。第五・六冊扉「字鏡集九（十一）」、第七冊中扉、単辺「字鏡集十四」、右に「万／十六字」と朱書、次に、「字鐘（ママ）集十四老广夕言食鹵耳」と目録一丁あり、前掲書に同じ。尾題「字鏡集十四」とあり、題下に「一校了」と朱書、十三・十四・十七・十八は恐らく前掲書と底本を等しくするか。第一冊第一―二三、第二―二四丁、第二冊第三―二二、第四―二一丁、第三冊第五―一八、第六―二二丁、第四冊第七―二一、第八―二八丁、第五冊第九―三〇、第一〇―二五丁、第六冊第一一・一二各二九丁、第七冊第一三―二九、第一四―三一丁、第八冊第一七―三二、第一八―三六丁。本文巻頭に「楽亭文庫」「桑名文庫」「立教館／図書印」「桑名」の朱印摸写され、「木正／辞／章」の朱印押捺さる。木村正辞旧蔵。

本書は、松平定信旧蔵、後洗雲亭加賀豊三郎氏の蔵に帰し、現在都立中央図書館加賀文庫に所蔵される〔室町〕写本を摸写したもの。但し底本は二〇巻の完本で、勉誠社の「古辞書大系」に影印されている。

第二冊の第四には、黒インクで書かれた多数の校字（或いは本書を印刷せんとしてのメモか）紙片が挟込まれている。本書は天地裁断され、朱校標記が切裁されている。第一四の目録は他巻と書写の体式異り、第一丁表に「人事部／老广夕（シャウカチ）言／飯食部／食鹵耳」とし、裏丁「老部一十五字」と小題して本文に入る。前掲書と同一筆者の手に成るか。ハ〇九―五―一三―八

附

伊藤東涯先生に就て　浜野知三郎　昭和一一年写（ペン書）　菊一冊

後補深緑色クロス装（二二・三×一四・三糎―横は背溝迄計測）背に金文字で「伊藤東涯先生に就て　浜野知三郎」と印さる。本文庫の改装。元表紙、匡郭外右に「財団法人斯文会」と印刷せる双辺（一八・二×一二・六五糎）有界一二行藍刷罫紙使用、「伊藤家譜／十一年十月廿二日／史料」と浜野氏墨書。其間に

青インクにて「本稿は故浜野穆軒先生（知三郎）草する所／にして其手筆なり　のだ（のだ赤鉛筆）」と、麻生太賀吉氏の後見で、斯道文庫理事、財団最後の文庫長として残務処理を行った野田勢次郎氏の注記がある。但し本稿は後述の如く、斯文会の手になるものと見ゆ。巻頭「伊藤東涯先生に就て／浜野知三郎／東涯先生の二百年祭に当りまして……」と本文に入る。匡郭外左に「1020」、下に左から横書で「TSNO1」と印された双辺（一八・三×一一・九五糎）有界二〇〇字詰薄青刷原稿用紙使用。「……之を以て私の講演／は終りといたします（終り）」と結ばる。四六枚、総裏打、本文庫によってクロス装菊判洋一冊に改装さる。

本書は、伊藤東涯没後二百年を記念し、斯文会の行った講演筆記で、本略解題㈤で触れた如く、「斯文」第一八編第一二号に翻印せられている。「堀川の堂（コギ）」「（キンジョウ）」「（コロウ）」「（イカヒキョウショ）」—本稿にも頻出する豬飼敬所ならむ「紹述（しやうじゆつざつさう）」「武田（さんかく）」「先生の基調（？）は……」「？」等、宛てるべき漢字の分らない所や聞取れない所が、ルビのみや、欠けたままで処理されている。本書には浜野氏が手を入れた跡はないので、校正で手を加えたものででもあろうか。こうした講演筆記の残っている所を見ると、浜野氏のこの講演は、メモ・手控の類のみを用意して行ったものであろう。

本書第一葉の後四行ほどが破損している。ハ〇九—六—一—一

追　記

本略解題を閉じるに当り、誤記・追補の類を一括訂正追記させて頂く。なお近日刊行予定の本文庫善本図録所収浜野文庫本の解題については、該書に増補改訂を行っているので之に依られたい。

略解題㈠三三六頁下段五行　行った—行つた

三三九頁はじめに末—（追補）なお浜野氏の旧勤務先第二中学校、現都立上野高等学校に、浜野氏の寄贈にかかる和漢書一六一点、一二九六冊が蔵され、平成六年三月に刊行された同校の「紀要」第二二集に、中澤伸弘氏の手により、「浜野文庫和本目録　付蔵書研究」として発表されている。

三七六頁上段四行　書呂告後人云—書㠯告後人云

略解題㈡三七六頁下段後七行—（追補）稿本類は、多く東京大学史料編纂所に蔵さる。

三八三頁下段後七行―（追補）なお本贋刻本には、刊年もそのままに覆刻された別版が存する。

三八五頁上段末行　慶安四年七月刊―慶安四年七月刊　〔後印〕。（追補）本版は「慶安四暦初秋／三條通菱屋町／林甚右衛門板」の双辺木記を持つものが初印で（或いは無刊記の初印本あるか）、次に本印本、次に「京師書坊奎文館主人瀬尾源兵衛新刊」の刊記を持つものが続くようである。なお本書の底本と目される山科言継等の天文二二年手写本が、川越市立図書館（新井政毅旧蔵）に存する。

四〇九頁下段九行―（追補）なお江藤正澄旧蔵書は神宮文庫に多く、一部太宰府天満宮にも蔵さる。

四一三頁上段一一行―（追補）なお浜臣自筆かと思われる慶安刊本首六巻（一冊）川瀬一馬氏蔵か。

略解題㈢二一三頁上段後七行（　）内―一月、江戸　和泉屋善兵衛修、殆ど文化六年跋刊本の覆刻であるが、附録の最終一丁は同板のようである。

二一五頁下段末行　史論奇鈔は、以下―松崎蘭谷に「唐宋名家歴代史論奇鈔」七巻（正徳四刊・嘉永二修等）の編著があり、本抄は此一部である。

二二一頁下段五行　豬飼〔敬所〕（彦）抄録　嘉永三年写（自筆）―豬飼〔敬所〕抄録　〔自筆〕。（追補）京都大学附属図書館蔵〔豬飼敬所遺著〕を検するに、敬所の没後、養子箕山（彦纘）が亡父の遺業を整斉編纂した跡が如実に見られる。本書は、その書体を仔細に比較検討するに、敬所自筆の断簡八葉に箕山筆の扉の如き一葉が混在して貼込まれたものと見るべきであろう。扉の如き一葉或いは箕山の編纂次のメモか。

略解題㈣四一四頁上段一〇行　「映文」―「知文」

四一八頁下段一一行―（追補）しかし最も蓋然性の高いのは、蔵書家として知られた酉山（享和元年没、享年七十）であろう。

四二九頁下段後七行―（追補）本書、武藤禎夫氏の「漢文体笑話ほん六種」に影印さる。延広真治氏示教。

略解題㈤三三二頁上段三行　景行天皇〕―景行天皇〕

補　記

他に見返第三行を「江都　製本所　野村新兵衛」とし、刊年のみで書肆名を欠く印本がある。